

平成26年度文化芸術創造都市推進事業 創造都市政策セミナーin 札幌市

主催者文化庁長官挨拶

ご紹介いただいた青柳でございます。文化芸術創造都市というのは、日本で非常に重要な社会的な役割を担いつつあるのだと思います。そのことはここにいるみなさんそれぞれが、それぞれの地域で取り組んでいらっしゃる事なので、よくご認識してらっしゃると思います。私は、去年の7月の七夕の時に今のポストに就任して、それからわか勉強でこの分野の事を見聞したり、勉強したりしてきたので、むしろ新参者です。ですから、その新参者が、見てきたことをこれから話すので、むしろ、実際にはこうなんだと、後でご意見をいただきたいと思っております。

第二次世界大戦が終わってから、世界でも奇跡的な復興を成し遂げ、もちろんドイツもそうですし、イタリアも日本も、不思議なことに敗戦国の方が、戦後の復興の中では連合国よりも、めざましい復興を遂げたのではないかと、それは、やっぱり戦禍を受けて、色々なシステムを徹底的に変えることができたのではないかと、そういう成長の後で、今我々は、ある成熟段階にきており、モデルが無くなってしまっております。そのために、これからこの日本という社会をどういう風にしていけばよいのか。傾向としては、様々な格差が広がります。例えば、地域の格差や、社会的な格差、そういう格差をどううまく拡大しないようにしていけばいいのか。そういった観点で、おそらくみなさまが取り組んでいらっしゃる、文化芸術創造都市に関するお仕事が、非常に重要な役割を担いつつあるのではないかと、私は認識しております。

特に、よく言われることですが、日本はアジア地域で、あるいは世界で、非常に不思議な三権分立を持っていると言われております。その三権分立が何かというと、いわゆる司法・立法・行政の三権ではなくて、権力とそれから名誉、お金のこの三権ではないかと考えております。日本以外の国では、権力とお金と名誉がだいたい結びついているんですね。ところが日本では、権力がある人は、名誉とお金がないし、お金がある人は、権力と名誉がないし、名誉がある人は権力とお金がないという、非常に世界的にも珍しい三権分立システムを持っている。これは、大変国として優れた社会ではないかと考えられます。よく言われることですが、東南アジアからの留学生などが来て、日本の金持ちの家に行ったんだけど、自分たちの国だったら多分正面の門から玄関まで車で5分10分ぐらいかかるところを、日本だととんでもない実業家の家に行っても、門から玄関まで10歩くらいしかない。そういうところに、代表的な大会社の社長をやっている人の家があるのは非常に親しみを覚えると言っていました。これは、恐らく世界で見ても、日本にしかない現象です。ある意味フラットな社会であると思われれます。

ところが、今現在日当たりのいい都市、つまり札幌のような様々な意味で行政的に地域の中核を成しているところ、あるいは、先端産業がたまたまあることによって地域が潤っている所、あるいは、京都のような歴史的に非常に恵まれた文化を持っている所、そういう日当たりの良い地域に比べて、現代の様々な条件の中で、決して恵まれていない、日当たりの悪い地域との格差が、どんどん広がっているのではないかと、という気が致します。その中で、決して日当たりがいいわけでは

はないけれども頑張っている都市が、最近たくさん日本の中で浮上りつつあるのではないか。文化庁に移ってからこの1年くらいで、色々な所を見させていただきました。そのことも念頭に置きながら、これから簡単に初心者として地方を解説し、地方の地域おこしがいかに日本社会全体にとって重要なのか、ということをお話させていただきたいと思います。

言わずもがなですが、空洞化で衰退していくような先進国では、いわゆる文化芸術創造都市というものが生まれてきていて、経済とか産業ではなくて、文化芸術が持つ創造性で地域を活性化させようとしている。このクリエイティブシティで一番重要なことは、やっぱりそれぞれの地域に住む住民の方たちが、自分たちで何か作品を作るように工夫しながら、考え抜き、試行錯誤し、そして、1つの壺、絵画、彫刻を、あるいは粘土細工を作り上げていくような、その苦心して何かを生み出す、という過程である。これは、文化芸術創造都市の特に創造という部分に込められているのではないかと考えております。文化庁でも、今まで色々と地域活性化に携わってきておりますけれども、いわゆる一般的なコンサルティング会社などに相談すると、本当に金太郎飴みたいな企画しか持ってこないんですね。もちろん彼らの経験というのは非常に大切だけれども、それをどうローカライズするか、その都市、地域にあったものにしていくか。これは、そこに住んでいる方々の心意気が一番大切であり、そこで色々創造するように、悩み苦しめそして何かを生み出させていただきたいということで、創造都市という言葉は、今、我々の社会の中で、その重要な役割を担っているのではないかと考えております。

ナント市などの、典型的な、選択的な衰退傾向を持っていて、その中で選択的な復活の仕方をした都市については、実に学ぶべきだけれど、やはり、今日は札幌市長がいらっしゃるので、ぜひ訴えたいのは、市長のイニシアチブというものが非常に重要だということです。このナント市や、金沢市もそうですし、創造都市で先行しているところでは、市長の存在が実に大きな役割を担っていると思います。ナント市のジャン＝マルク・エローにしても、30年近く市長をやってイニシアチブをとって、そして、このまちを文化で再びかつてのようなまちにするんだという、非常に強い意志のもとに全体を引っ張ってきております。

それから、私の尊敬する、金沢市の山出保元市長にしても、やっぱり5期・20年間なされたからこそ、金沢市を、あれだけの文化都市にすることができたのではないかと思います。恐らく、同じ市を持っていても、違う方がその10年後に次の市長になってやっていくというと、なかなか一貫したイメージの中での創造都市を創るということができないのではないかと。もちろんその一方では、何期もやるのはよくないというような、批判がありますけれども、少なくとも世界的に創造都市を考えた場合には、ほとんどのところで、イニシアチブを強烈に発揮なさっている首長の存在が例外なくあるということを、我々は意識せざるをえないのではないかと思います。そして、だからこそ、首長選挙に我々も丁寧に慎重に選ぶことが必要になってくるのではないかなと思っています。

以前は、社会の仕組みが今よりもかなり単純でありました。単純であったからこそ、国が十把一絡げに政策を決めて、それが日本全体にあまねくある一定の効用を持って浸透していくことができました。ところが、どこでも成長した国はそうだけれども、どんどん日本社会が複雑になってくる

と、それぞれの地域での必要なもの、あるいは、飢えや乾き、あるいはそこで充足しているものというものは、それぞれ違ってきます。国が一様に政策を掲げて、一様に十把一絡げにやっていくことができなくなっているからこそ、地方分権というものが必要になってきているわけです。ですから、国の役割は、以前よりも小さくならざるを得なくて、それぞれの地域で特性にあった政策を、その地域が作り上げて実行していかないと、本当に有効性のある、あるいは、効率性の高い行政というものはできなくなってしまう。それが、成熟社会なんですね。であるからこそ、そのことは、多くの国で認識されるようになって、地方分権、あるいは、三位一体の政策とか、様々なことで、地方の判断に任せる政策ができてきている。だから、地域おこしというものの、地域の首長や議会が、益々重要になっていると同時に、そのことを支えるための一人ひとりの市民が、何があればその地域はよくなるのか、何をやってもらえれば自分たちの生活がより安全になるのか、それぞれが主張せざるを得なくなってくる。つまり、アドボケイティングが非常に重要になっています。一人ひとりがマクロな政治に関わる必要はないかもしれませんが、自分たちの生活を守るためには、ある一定の主張をせざるを得なくなってくる、ということが、現代社会の過去の10年位前とは大きく違う状況ではないかと思われまます。

フランク・ゲーリー作品である、グッゲンハイム美術館に出来る前も出来てからも行きましたけれども、この美術館1つで、まちが劇的に変わるんですね。年間100万人以上の方々が、ここを訪れるようになったと言われております。彼が作る建築は、本当に彫刻のようなもので、この美術館も戦艦のようなもので、しかもその表現にチタンの板を貼ってあるんですけども、実は、これは日本製で、住友金属が作った最先端の素晴らしい金属なんです。それをふんだんに使っています。日本には素晴らしい建築家がたくさんいますけれども、まちのメルクマールみたいになる形で、誰もが注目するこれだけの存在感のある建築を造れる建築家というのは日本にはいません。例えば、21世紀美術館を作った瀬野さんや、長崎の美術館を作った隈さんなど、色々おりますけれども、まちがガラッと変わるくらいのインパクトのある建築を作る人はいない。だから今、我々、三宅一生さんと僕で組んで、国立デザイン美術館つくる会を作っています。

そういう様々な世界的な傾向、それから、日本の独自の傾向というものを考えて、文化庁では、平成15年から、文化芸術創造都市の表彰を行っております。現在では、28のまちが創造都市になっています。そこでは、やっぱりみなさんそれぞれの工夫を凝らして、まちおこしに大変真剣に取り組んでいらっしゃいますし、その効果が一部現れてきている。しかし、やっぱり日本の中でこのような形で本当に素晴らしい効果を挙げているのは、金沢ではないかと思えます。それは、21世紀美術館を作ったり、様々な市の予算のかなりの部分を文化事業に充てたりしているということ。もちろん、金沢という、文化的に、大変に恵まれた環境にあるということもありますけれども、それをさらに拡大する形での文化政策が市として行われているということです。中には、鈴木大拙館のような、ただ瞑想するためだけの公共空間を作り上げ、それを市長のイニシアチブで谷口吉生さんという大変すぐれた建築家に作らせるという、かなり強引なやり方までしていますが、それが、こ

ういういものを産ませる1つの大きな原因だったのではないかと思います。ナント市のやり方を真似た音楽祭などもしていて、様々な事柄をやっています。やっぱり20年間、ブレることなく金沢市を文化都市に育て上げていくことが、一貫して、山出さん自身の政策として繋がっていた。このことが、この結果を招いたのではないかと思います。

最近、兵庫県の日本海側にある豊岡市に行きました。ここは文化というよりも絶滅したコウノトリを野生化して野に放とうということを広め、成功しつつあるところです。1971年に、完全に野生のコウノトリが絶滅してしまいました。そのために、ロシアのハバロフスクから二組のコウノトリのつがいを持ってきて、そしてそれを飼育場で育てて、そしてその子どもたちを野に放つという事業をずっと続け、今現在、野に放たれているのが87羽、これはもう完全に野生として自分たちで過ごしています。それから、まだ飼育場の中に八十何羽、合計200羽近くが今集まっております。

しかも、この豊岡市では、色んな複合条件が重なってなんですが、絶滅した大きな条件の1つが農薬だったということがわかったので、無農薬、減農薬で田んぼでお米を育てる。そして、そのことによって、田んぼにドジョウやウナギなどコウノトリの食物が蘇るようにしている。ところが、農薬を減らしたり、使わなかったりすると、当然テマヒマがかかるので、そこでとれるお米は1.5倍～2倍することになってしまう。ところが、その1.5倍～2倍の値段を、コウノトリのお米ということでブランド化して売っており、それが非常に売れるようになっている。小学校の給食などでも、減農薬、無農薬のお米を使うようにしている。農家がむしろ率先してお米を耕すようになってきている。そのために、おそらく豊岡市の田んぼはさらに、コウノトリの数を増やしても大丈夫なくらいの食料を生産し、ドジョウやウナギを生かしていけるようになりつつあります。

もうひとつは、豊岡市にはある川がありまして、その出口の両側に玄武岩がドカーンとあるために、普通であれば海に近づくと、どんどん河口の幅が広がっていくのですが、あそこは広がる可能性がないので、河口の手前が沼地のようになっている。その沼地のところに、柳行李の元になる柳がたくさん生えていて、そしてその柳の根本のところに、やはり沼地ですから、ドジョウやウナギやあるいは、コウノトリたちが食べる様々な貝が生息するようになってきているという、非常にうまい回転をしているんですね。現豊岡市長は、県議会議員だった時に、コウノトリのことしか質問しないとくらいにマニアックなコウノトリにこだわった地方政治家で、ある一時期に、京都大学の農学部で大学院に入学してコウノトリの生態研究をして、そして、豊岡市長選に立候補して市長になり、それでこの地域をコウノトリを軸に活性化するんだ、ということですと取り組んでおります。ですから、彼は、コウノトリの話になり、そして豊岡市のまちおこしのことになると、10分間・20分間・30分間、それぞれのスピーチ全てを完璧にできるんです。私が聞いていても惚れ惚れとするぐらい理路整然と、それから魅力のある言葉で説明されます。そういう首長がいるから、そして、そのことにまた賛同する市民の方々がいるから、このような事業が成功したんじゃないか、と思います。

ですから、芸術文化創造都市という範囲の中にも、決して芸術文化だけではなくて、その土地にあった、エコロジカルなやり方があったり、あるいはある特殊な農業を育てて、それを文化にしてい

くというようなことがあったり、あるいは、むしろもう産業というものを呼び込んで、それが、例えば富士山の麓には忍野村というところがあります。ここには富士ファナックというロボットを作る会社が、本社機能、工場機能全部を持っています。非常に自然とも調和した工場を、建物をつくり、そして、地域に色々貢献できるような社会貢献チームを社内に作って、うまく忍野村と融合した政策をとったりしている。だから、本当に様々な組み合わせがあると思います。それをいかにそれぞれの地域に住んでらっしゃる方が、見つけて、そしてブラッシュアップして、それを定着化し、そして長続きするようにしていくか、ということが、おそらくこの芸術文化創造都市の根幹であり、これが、日本の人口がまだまだ減って少子化がさらに進んでも、なお、活力があり、そこに住んでいるということに誇りが持てる地域にしていくことではないかな、と僕は考えています。以上です。

上田市長挨拶

札幌市長の上田でございます。歓迎を申し上げます。青柳長官をはじめ、佐々木先生、北川フラムさん、そして多くのパネリストの皆様方、そして、ご参加をいただきました皆様方、ようこそ札幌へおいでいただきました。心から歓迎を申し上げたいと思います。

札幌市では、第一回国際芸術祭をこの7月19日から開催させていただいておりますが、その最中に創造都市の政策セミナーという企画が、こうして札幌で持たれるということになり本当に嬉しく思っております。芸術祭が成功するかどうか、それは入場者が多いかどうかということではなくて、私達が、この芸術祭において何を感じ、これから私達が何を起こすか。そういう気力なり、動機なり、そういったものを持つことができるかどうか。そして、どうそれをものにしていくか、ということにかかっていると思います。全国の様々な事例を学習させていただきながら、この札幌で芸術祭から何を学び、何をこれから私達は勝ち取ろうとしているのか、ということ、時代を見極めていくという意味でも、本当に意義深く、心から感謝を申し上げたい、とこのように思っております。

札幌は本当に自然豊かな場所ですが、今から145年前、明治2年に北海道開拓使が設けられました。その当時札幌の人口は約200人ぐらいであったとお聞きしておりますが、100年かかりまして、1971年に100万人という人口に相成りました。そして72年東京オリンピックが開かれたということで、札幌も国際都市を目指していこう、となったわけですが、この後わずか15年、1985年までの間に100万人が150万人になりました。それから、40年経とうとしているわけですが、それから44万人人口が増え、今194万人になっておりますけれども、145年の間に、しかも後半の間に格段と人口が伸びているという、そういうまちの状況です。

北海道の文化・経済、あるいは、札幌の経済というのは、人口が伸びるということによって内需が活性化し、膨張化、肥大化していくことによって発展をしています。しかし、いよいよこの人口膨張も先が見えてまいりました。来年2015年をピークに少し下がっていき、このまちでは、かつてない人口減少という社会を迎えます。それから、札幌の合計特殊出生率は1.04という数値でして、どんどん人が生まれなくなっているということと合わせて、人口構造が超高齢化していると

ということが、札幌の抱えている問題でございます。人口膨張が無くなり少子化とともに、これからの札幌の経済がどうなるかということ、今までの膨張・成長発展していくところから完全に変わっていかねば、社会増発展、あるいは持続可能な発展はないだろうと。そして、我々が豊かだと思える基準を変えてゆくものに注がなきゃだめだ、と私達は考えています。その過程で、私達は、2006年に創造都市さっぽろという宣言をさせていただきました。既存の価値を様々な観点から継承し直す創造的な活動や発想が、新たな価値を生んでくるのではないかと。そんな想いで創造性を掲げて、2004年に発足したユネスコのCCNなどを勉強しながら、私達のまちを創造的な視点でものを考えていく、という考え方に転換させていただいたということでございます。

幸いなことに、私達のまちの社会的な課題を解決をしていくために人々が考えた色々な時代がございます。例えば、雪。世界の100万人以上の大都市で、最も雪が降るのが札幌でございます。これをどうするか。大都市でなければ、自分で歩いて行けばいいのですが、多くの人がこのまちで経済活動、文化活動をし、様々な生活をしていく場合に、道はしっかり除雪をしなければならない。要するに、都市生活というものを送るためには、雪は邪魔なものであったんですね。どうしようもない、我慢するしかない、耐えるしかない、という風に思われていたものを、これを雪まつりという形で転換をして世界の一大観光地に札幌市をならしめたというのが雪まつりです。邪魔なものを有効なものに、という発想をした先人がいた、ということです。これが、66年前のことです。

それから、モエレ沼公園というのがございます。我々が都市生活をしていく間に、たくさん出るごみの最終処分として結局埋め立てをします。モエレ沼というところに、札幌市のごみを沢山埋め込みました。その跡をどうするか、ということで考えたのが、公園化・緑地化をする、ということでした。そして、単に緑地化をするのではなくて、イサム・ノグチさんという偉大な芸術家においでいただきまして、まちづくりの中で、公園づくりを手伝っていただきたい、という願いをし、色々な場所を見ていただいた所、「自分のデザインをするなら、ここだ！」ということでそのゴミ処理場での公園づくりをデザインしていただいたのが、モエレ沼公園であります。そこに、本物の山、プレイマウンテンと、モエレ山という50メートルほどの2つの山があります。そういう、素晴らしい公園を作っていただきました。

困難な社会的問題を解決するために、それをプラスの方向にしていく、という経験を私達は持っております。そういう創造的、発展的な物の考え方を公園施設や、雪の処理など、様々な場面で発揮できる可能性がある、と私達は自分達でまちの問題を考えて、この間取り組んできたわけでございます。そしてそれを、様々な場面にもっともっと活かせるという活動にしていこう、というのが、まちづくりの中核に据える概念としての、「創造都市さっぽろ」です。音楽も色々な芸術的な側面で刺激をし、感動を共有する。互いに讃え合うことができる、感じあうことができ、共振ができる。そういう関係を作り出し、人間の様々な創造的な威力を引き出すということによって、新しいまちづくりのあり方をみんなで模索していこうじゃないか。それを後押しする市政というものを進めていこうじゃないか。ということで、この間手引をさせていただいたということでございます。

幸いなことに2010年に芸術文化創造都市文化長官表彰の2回目の時に札幌市を選んでいただきました。昨年の2013年11月11日、佐々木先生、長官も大変ご指導いただきながら、ユネスコの創造都市ネットワークの中に登録をして喜んでいるところでもありますけれども、世界的なレベルで見て札幌市のクオリティが、世界の創造都市の仲間に入れても恥ずかしくないよね、と認めていただいたと、私どもは認識しております。これを契機に、本当にこのまちが、創造的で、活動的で、発想豊かなそんなまちにしていきたい、という想いをいっそう強くしているところでございます。

その創造都市活動の発展形といたしまして、我々が取り組んでいることが、世界的なレベルで見てひとりよがりでは決してない、ということを検証しながら、このまちづくりを進めていこうということで、国際芸術祭を3年に一度開催いたします。世界の様々な評価に耐えてこられた芸術祭の皆様方、アーティストの皆様方、キュレーターの皆様方に、一同に会していただきまして、札幌のやっていること、そして、札幌の資源を見つめなおしていただきながら、地元の芸術家クリエイターそういう方々と刺激し合っていただきまして、私達の取組を検証しながら、さらに発展させていく、そんな契機にこの芸術祭を持っていきたい、そんな風に考えているところでございます。ゲストディレクターには坂本龍一さんに就いていただきまして、様々な議論を進めていく中で、「都市と自然」という大きなテーマになりました。資源を誇りに、そして、それを都市に提供するという形で産業が発展してきたまちづくりをやってきましたが、そこから何を発展させていくか、という段階にすでに来ているわけです。資源収奪的な経済から創造的な経済へ私達が歩いていく長い一歩にできれば、本当に嬉しく思いますし、ぜひそういう目で作品群を鑑賞し、そして、これからの、これまでの札幌・北海道を展望できる、そんな意欲を私達が共有できるような芸術祭になることを心から期待しているところでございます。

本日のこのセミナー、多くの皆様方に様々なご意見を交わしていただく中で、私自身も、先ほど首長のイニシアチブについて、長官からアジテーションを受けましたので、刺激的にお聞きしたいと考えております。ぜひ実り多いセミナーになりますことをご期待申し上げます。そして、皆さまのご来札、心から歓迎をするということで、ご挨拶とさせていただきますと思います。

北川フラム氏講演

こんにちは、北川です。僕は、越後妻有・大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭などに関わるなかで、地域は相当疲弊していることと感じます。格差はものすごく広がっていき、第一次産業が壊滅的にまずい。僕は戦後生まれの67歳ですが、「美術いいな」と思っているのうのとやってこられた人間です。しかし、僕より上の世代の人達は、戦中、あるいは戦前も含めて相当厳しい時代を生きてこられました。その人達が、今なにかとんでもない状況に追い込まれてしまっている。これはちょっとおかしいんじゃないか。それが、大地の芸術祭のきっかけになりました。

大地の芸術祭は、平成の大合併という国・県の政策がきっかけで生まれました。例えば、長野県の小布施というのは、人口1万2千人ですが、本当によくやっている町だと思います。広さは越後

妻有の40分の1くらいですが、小布施がすごいのは、小さな町でありながら、昭和の合併以前から10の集落にこだわっているということです。一番リアリティがあるのは、それぞれの10あった集落の単位です。そこを丁寧にする中で、相当すごい成果を上げてきていると思います。

越後妻有は、平成の大合併により、学校の校区で言いますと、150くらいの校区があった地域が今や1つの市になりました。津南町は合併しませんでしたから、十日町市と津南町の2つからなります。

僕の職場は代官山にあります。代官山というのは、榎文彦さんが設計したヒルサイドテラスが町の骨格をつくってきました。これは日本の代表的なモダニズム建築ですが、いいまちづくりをしていると言われています。

代官山は渋谷に隣接しています。渋谷は名前の通り谷になっています。谷に沿ってネット企業や文化施設もいろいろなところがありました。駅を降りると、そこから道玄坂に行ける、宮益坂に行ける、というように、いろいろな方向へ出られました。しかし今、駅は地中化し、塞がれてしまった。地中を通してしか外へ出られません。渋谷は特区となり、駅を囲んで高層ビルがものすごい勢いで建ち始めています。しかもその開発費は、全部無利子で貸すので、建て放題です。こんなこと本当に平気でやるのか、ということが今日本で起きているのです。

そのうちの計画のひとつを手伝えとよばれ、僕は「そうした計画には反対だ」と言ったわけですが、「そうじゃないんだ、みんなダメだというのはわかってる。でもその中でどうするかを考えなくては行けないんです」と言われ、関わることになりました。

ビルに囲まれた内側は非常に便利になるけれど、その外側の人達はとんでもないことになってしまう。桜丘という町に関して言うと、地権者が約1,000人いて、1世帯あたり平均が1.6人です。地権者のほとんどは、おじいちゃんおばあちゃん。そのような地区にもものすごい高層ビルがたつ町を作ろうとしている。これに対し、僕が出した提案は、「このビルに囲まれた駅周辺については自分はまったく興味がない。それは勝手にやってください。私たちはこうしたビルの外をどうするかだけを考えましょう」ということでしたが、意外にも地権者たちが感応し始めたのです。驚きました。そういうおじいちゃん、おばあちゃん達と今、ワークショップなどをやっていて、学校の記憶を求めて運動会をやりうとか話しています。

その地区のお店は、ほとんどがチェーン店なので、儲からなくなったら退去するというスタンスです。それをやられたらたまらない。釧路がそうになってしまい、相当厳しいことになっています。桜丘では、このような状況で、じいちゃん、ばあちゃん以外の人たちによる応援団を2020年までにどう作っていくかが鍵だと思っています。

代官山も、「アーバンヴィレッジ代官山」をキーワードとして、都市の中に村を作ろうとしてきました。居住者とオフィスと店舗が良いバランスで成立しないとまずいと思ってやっています。

大地の芸術祭はすでに5回を終えました。私は、越後妻有、瀬戸内、そしてその他の地域でも仕事をやらせていただいています。それによる欠点というのは、それぞれの場所で違うことを考えて、

場所に合わせたことをやっても、似てしまうということがあります。一方、決定的なプラスは、アーティストやサポーターなど、それぞれの場所でやっている人たちのいろいろなことが毎年蓄積されて繋がってバトンタッチされていくということです。このメリットは大きいです。

例えば、この春、千葉県の市原市でもアートイベントをやりましたが、瀬戸内の人が大勢手伝いに来たり、香港や上海からも大勢参加しました。今日札幌に来て「えっ」と思ったのですが、瀬戸内の人たちが手伝いに来ているのです。

都市が人口減となっていく中で、しかも第三次の人類の大移動が今起きているわけですが、実際、通信、金融、社会システムの一元化などは、ヴァーチャルな仕組みです。それに対して観光客、旅行者、あるいは外国人労働者と並んで、ささやかではありますが、芸術祭や創造都市的な部分に関わる人達は、猛烈に移動している。手伝ったり、あるいは、お客になっているのです。越後妻有や瀬戸芸で言いますと、外国人のサポーターがぐんぐん増えてきています。これは、相当驚くべきことで、ここに1つのヒントがあると思います。その蓄積をどう活かしていけばいいか。

日本列島というのは、世界でも珍しい島です。寒流と暖流がぶつかって、しかも大陸からの季節風が吹いて、こんなに雨が多い。だから土が豊かでないところはない。さらに決定的なのは、全部が海に囲まれているので、州とか鼻とか岬とか言われるあらゆるところから、アプローチできるという特色を持っています。イタリアも同じく、ほとんどあらゆるところからアプローチできます。これは非常に大きな特色です。

最近、日本海側を通して北海道の方から来た人の頭蓋骨が富山市で見つかりました。どちらかというと太平洋側は南から上がってきた人が来ている。その2つの文化が混ざり合っているという面白さ、これも日本の特色だと思います。つまり、私達はどこから来てどこへ行くのか、ということの根底に考えないとまずいのです。

縄文土器はそれなりに日本美術の特色を表しています。越後というのは化外の地でした。字の通り、「越」の国のしかもまた「後ろ」。そして、越後妻有というのは、新潟の中でも、とどの「つまり」です。つまり、とんでもない奥の奥ですね。『北越雪譜』に描かれた場所です。越後妻有の平均積雪が高さ3mです。雪は圧縮されますから、12mは降り積もっているということです。

越後妻有には棚田が多くみられます。峠という集落には、日本有数の美しい棚田があります。今から約30年前、この集落の人が、自分たちは実は三河・尾張・伊勢から追われ追われて、ついに富山で壊滅した一向宗の門徒の末裔だということを明かしました。信長一派にやられて、山の一番上まで来てやっと生きのびることができた。だから、山の上から下まで田んぼを作ったわけです。

もう一つ特徴的な風景が瀬替えです。山ばかりで平地が少ないために、川の流れをショートカットして、そこを田んぼに変えている、というわけです。

ここで新潟全体の話をしてみると、明治維新の頃の日本の人口3000万人のうち180万人、6%強が新潟にいました。日本で一番多い人口を抱えていたのです。政治、経済、宗教、その他何らかの理由で逃れてきた人たち、近畿中央に住めない人たちを受け入れていったのが新潟でした。

ある意味で、北海道と似ているところもあるわけですが、とにかく、来る人を全部受け入れて、その分米を作ったという場所です。新潟は日本一の米どころであり、日本一の人口を抱えていたわけですが、これは、ある意味でワーキングシェアを實に見事にやっていたことになります。

日本は農業を捨てる、あるいは効率が悪いところの田んぼをやめる。山奥の集落に住むお年寄りには、そこから降りて来なさい、米作るな、コストが合わない、道路の除雪なんてやってられない、という話になるわけです。しかし、それでいいのか、と思うのです。そこで頑張ってきた、じいちゃん、ばあちゃん、明日がやがてなくなり、亡くなったあとも、お墓を守る人がいないという現実。集落がなくなるという厳しさを、僕は越後妻有に来る前もなんとなくわかっていたように思っていました。しかし、やってみて初めてわかったのは、自分の得意手をやらせてもらえなくなることが彼らにとってどれだけ厳しいことであるかということです。十日町に20年近く通ってわかったのは、これはとにかく大変だということです。この20年の中で、少しは変わってきました。みんなの特技とか、これなら見せたい、これなら私にもできるということで、参加できるようなやり方に変えていきたいと思っています。

直感的に、プロジェクトの最初から「人間は自然の一部である」ということを言い続けてきています。これしか大地の芸術祭のコンセプトはありません。越後妻有は日本有数の豪雪地で、中山間地です。山肌に田んぼを作るから、道は全部山を巻いて作っていく。ですから、雨が降ったら道が駄目になるのは、当たり前の話ですね。今も越後湯沢から来る1つの国道が駄目でしたし、延々と道路を直していくしかないんです。そういう場所で生きている。しかも多い所で一年に8回雪下ろしをしなければ、屋根が抜けてしまう。いい・悪いではない中で、生きてきたということ。そういう厳しい自然の中で知恵を絞りながらやっていく、それこそが誇りだったわけですね。ところが、それを全然違う価値観で、「雪下ろし8回やるのばかばかしい、除雪するのは大変だ、山奥まで道路なんて冗談じゃない」と否定する。まさに効率化との戦いがこれから始まるという風に思っているわけです。

アートは場所を発見します。この雪国の中で、ネコの額ほどの田んぼをやらざるを得ない。後継者がいない。そのような現実に対して、寿ぎたい(ことほぎたい)、と僕は思ったのです。でもそこは人の土地です。人の土地にアートなるものをやらせてもらうのは、ほぼ無理ですね。そこで、その土地の持ち主を説得するために、学習とか交渉とか凄まじい形の色々なことが行われ、それを通して地域の意識が開かれていくのです。アーティストが作品をつくる時、人の土地であるし、よく知らない土地ですから、地元の人達が手伝いいたします。協働が生まれる。さらに、アートは、絶対写真ではわかりませんし、ロコミで、人を呼ぶ力がある。発見、交流、交渉、協働、そして人を呼ぶ——これが、アートの役割としてあったわけです。

そういう中で、公共工事をできるだけ利用します。アートのための予算はない。たとえば、コテージを4つ作る予算で、ジェームス・タレルの「光の館」を作りました。屋根がスライドして矩形に切り取られた空が見えます。これは、合併施策の中で作られた能舞台です。これは、ボルタンスキーが20tの古着を積み重ねたものですが、クレーンが「神の手」のように無作為につまみでは、落とすという——まるで私達の運命を暗示するような作品をやったわけです。ボルタンスキーはこれをやる

にあたって、東北を回っています。これは越後妻有里山現代美術館です。美術館ですが、生の土を強引に入れてあります。札幌芸術祭で仕事をしているカールステン・ニコライも越後妻有では、常連でがんばって仕事をやってくれています。

越後妻有では、できるだけある資源を使おうということが重要で、空家プロジェクトを行っています。空家というのは、二冬雪下ろしをしないと、だいたい屋根が抜けて、ペンペン草が生えます。あばら屋になっていくわけですね。しかし、家を取り壊すだけでも数百万、維持するだけでも毎年数十万円かかります。まさにこの地域の過疎高齢化という紛れもない事実の象徴です。これをちゃんとプラスの資源に変えない限りダメだ、そうしないと、よその価値をそのまま受け入れざるをえなくなる。そうなったら、この地域はだめになる、と思い、美術館みたいなものに変えていきました。

これは、2000年の第1回目につくられたマリーナ・アブラモヴィッチの「夢の家」です。4部屋を寝室に変えて、宿屋にしました。家主の村山さんというおばあちゃんは、今は東京に住んでいますが、「夢の家」ができたことで、いつでも田舎に帰れるし、自分の部屋も残されていて、家を維持するためのお金もかからない、人に迷惑をかけないで帰れる。そしてマリーナ・アブラモヴィッチというスーパースターの作品がいつでも見られる。そこにお客さんが宿泊することで、わずかですが地域にケータリングや管理のお金が入る。アートがすごいのは、普段だれも来ない集落にいろんな人たち、若い人たちが来て、交流が始まったということですね。

越後妻有では、廃校の再生も行っています。ジャン・カルマン、クリスチャン・ボルタンスキーがやったのが、「最後の教室」という作品です。この間、日経新聞の一番うまい廃校の使われ方に選ばれたのが、「田島征三&鉢 絵本と木の実の美術館」です。鉢という集落の学校が廃校になり、それに伴って3人の子どもたちが転校しなくてはなくなりました。その子どもたちが、かつていた学校に来る。そして、自分たちがやっていた菜園を見に来るというストーリーをこの学校で再現しました。実はこの鉢という集落には尾身という名前の人がいないんですね。日本中にいる尾身さんというのは、ここの出身なのです。

このように大地の芸術祭が4回続き、5回目のときに佐藤卓さんというグラフィックデザイナーの方向が、わかりやすいマークにしたほうがいいということでこのようなロゴマークをデザインされました。市長が実質的には、大地の芸術祭の里として、政策の中心に「文化・創造」ということを置こうという気持ちもおありでしたので、ロゴマークを非常に単純化し、なんにでも使おうということにしたわけですね。

越後妻有では、私達は200集落にこだわるというやり方をやっています。つまり、生活実感がある単位でなければ、人間はだめだろうと、言うようなことですね。例えば、蓬平という集落の住民は、蓬平のためならなんでもやります。松代町のためだったら、まあまあ。しかし合併でできた新十日町市にはリアリティはないですね。ですから、まず集落という単位、その素晴らしさを含めて、作品を作っていこうとしてきました。

来年は第6回ですが、今までにつくられてきた施設や作品はすでに200以上あります。今回は、それぞれの集落が、それぞれのテーマで、企業、学校、団体、あるいは、劇団・アーティストとどうや

って関わり、つながっていくかを考えています。すべての場所は、土地があって、山があって、そこに気象がからんで植生が変わってくる。つまり、地形と自然条件との関わりの中に私達は生きています。そういう場所に縄文の人たちが住みだした。約4～5千年前ですね。その後、約1500年前から、米を作り出して、土地利用が行われた。このように私達は生きてきました。これが「ローカリティ」ということです。

一方で、私達は、いろいろな意味でグローバリゼーションの中で生きざるを得ないし、この国の中で、良し悪しは別にして生きざるを得ない。その時にどうやるかということを考える手がかりとして、アート、建築はあるだろうと思ったわけです。これが、大地の芸術祭の出発です。つまり、否応なく世界の流れに翻弄されるけれども、その時に自分たちの足場、何が自分たちの特徴で、先祖はどういう気象の中で生きてきたか、ということを確認する。それがアート、建築だろうと思ってやってきました。

そのような文脈のなかで交流館を美術館に変え、「越後妻有里山現代美術館」としました。これは、ローカリティとグローバリゼーションの掛けあわせた場所です。グローバリゼーションに翻弄されていく中で、私達は、何をやるのかということを考えようとした。いろいろな場所に人が住み、食べ物を採取し、それを料理しながら生きてきた。それぞれの土地が「人間の土地」だと。これはサンテグジュペリの言葉ですが、そういったものとして、美術・芸術文化があるだろう。これを出発にしようと考えました。

来年に向けて、いくつかの課題があります。まず大きいのは、200を超える常設作品をどうするか。これを見るだけで一週間以上かかります。瀬戸芸は二回を終えましたが、去年の二回目は平均2泊を越えました。一回目は平均の滞在が1.8日くらいでしたが、二回目は2日を超えたのです。これは非常に重要な事だと思っています。しかし妻有は作品が200も点在していて、2日では見られません。いろいろとダイジェストでまわるという方法もありますが、それぞれのエリアごとにまわって堪能できる仕組みを作れるようにしたいと思っています。その目的は、お客さんのために1つ。2つ目は、サポーターたちのためです。施設ごとの対応(管理)だと、なかなか人間に関われないわけですが、あるエリアとした場合、サポーターたちは、地域の人達とつながりながら、いろいろとやっていけるでしょう。これがサポーターが継続的に関わっていくためには、かなり重要だろうということで、それぞれのエリアごとにテーマの設定をしました。

例えば、小屋丸という集落はフランスのジャン＝ミシェル・アルペローラという素晴らしいアーティストの作品がありながら、それを開館できないんですね。昔は小屋丸集落も20軒、30軒あったけれど、今は3軒しかない。それでは守れないのだから、広域で守るような考え方、手伝えるやり方はできないだろうかということです。これは行政の区分とは全く違います。この間にできてきた繋がりや人の動き方も含めて、いろいろ考えてエリア分けしています。

例えば、下条エリアの説明をしますと、ここはテーマとしては、アジアの稲作文化でやろうと思っています。キッドラック・タヒミックというフィリピンの有名なドキュメント映画監督が、彼が住むイフガオの村の人々と下条の住民と一緒に、棚田をテーマにした作品をつくりました。イフガオの棚田は世界遺産になっていて、下条の人々とイフガオの人々の交流が現在も続いています。

この「うぶすなの家」のある地区は、中越地震の時に、6軒しかない上に1軒の家主がいなくなっ
てしまいました。その一軒に、田中文男さんという日本一の棟梁が最後の仕事として関わり、安藤
邦廣さんという古民家建築の研究者が設計をしてくれて、8人の焼き物の名手たちが入ることにな
りました。そこにレストランをつくり、地元のサポーターのお母さんたちと地元の山野草を集めて、
プロが入って地元の料理をメニューにしました。これは典型的な事例ですが、人がいなくなって、
そのままだとあばら屋になる家を使って、地元の食材で地元のお母さんたちの料理を出す。だけ
どいろいろなプロセスにプロたちが関わるというやり方です。今年の3月には、8つの集落で実験
的におもてなし料理を供しました。お母さん達は普通の料理を作る。でもお客さんの相手をするの
は、旦那達ではなく、お母さん達です、とお願いしたわけです。

また、廃校で土をテーマにした展示もやります。窓に水と土で絵を描く。徹底的に泥。この土で福
島のアーティストが作品をつくります。

これも中越大震災の復興事業の一環、公共事業でつくられた東屋です。ドミニク・ペローというフ
ランスの建築家の作品ですね。こういう形でテーマをもちながら、エリア内の作品をつなげましょ
うということです。

あるいは、清津川という信濃川の支流はものすごくきれいな川ですが、そこは「エメラルドルート」
という形で、トレッキングをやりたいということ、廃校を使うことになっています。そこに、里山
現代美術館の分館として、こういう大きな作品を展示することを考えています。このエリアの、山を
越えたところにある集落では、いつも春になると地元の人達が、かかしの作品を出してきてくれま
す。またカルデアングリーンは、自然がつくった名建築というか、素晴らしい作品です。こういった
エリアでやりましょうということですね。

廃校プロジェクトには、1つの大きなテーマがあります。大人の人口が減り、子どもたちがいなく
なり、小学校が廃校になる。これは厳然とした事実です。でも、学校が物理的になくなると、地域は
本当にだめになります。そういう中で、来年から新しい廃校で、食・スポーツ・パフォーマンス・農を
テーマにプロジェクトを展開します。ここは教育委員会の管理する学校ではありませんが、農業を
中心に置いて、僕らの嫌いな主要5科目以外の授業、体育・美術・家庭科・音楽でカリキュラムを
組もうと思っています。これはかなりすごいレベルでやることを考えていて、現在その準備をしてい
ます。

そこでは都市と地域の交換を徹底的にやろうと思っています。例えば、サッカー選手がいます。彼
らは必死で、10歳位から30歳位までJ1でサッカーをやる。しかし30過ぎてサッカーで食べれる
人はあまりいません。この人達の「誇り」というのは、スポーツを教えるとか、サッカーでボールを
蹴ること。この人達が、この地域だと月十数万円で生きていけます。子どもたちにサッカーに教え、
お年寄りたちとラジオ体操をやり、学校にも時々先生として教えに行く。十数万円で暮らせて、しか
も、「田中太郎さん来てくれてありがとう」と言われる関係があつて、誇りを持って生きることができ
る。これが、地域が持っている力です。日本サッカー協会の事務局が、ずっと僕のおっかけをして
いたんですね。Jリーグは地域密着を掲げてスタートしたけれど、今、サッカーサッカー言っている

けれども、地元は相当弱くなっている。個々の選手が目的みたいになっていて、それはまずいぞと。そこでもう一度原点に戻ろうということを考えているわけです。

これは、お芝居もアートも同じです。例えば、兵庫県の豊岡市は、県のコンベンションセンターをお芝居のホールとレジデンス施設に変えましたね。コウノトリの次は、お芝居を少しやろうぜと思っていろいろですね。そういう事例を含めて、スポーツや芝居、アートをやっている人たちがやっている場所が、やっぱり田舎にはありえるのだと思うのです。農業をやりながら、得意手を活かしてやっていく、そういう学校を作ろうと。このエリアには、オーストラリア・ハウスもあって、来年はその他の外国も少しずつ関わり始めます。

津南町にある集落は台湾の集落と姉妹協定を結ぶなど、「東アジア芸術村」をテーマにしています。台湾は、5年前から妻有から学んで、猛烈な文化都市づくりをしています。また、企業が相当関わってだしてきました。アウトドアブランドの KEEN が、ある集落に入っているいろんなことを一緒にやりだしているんですが、面白いのは、昔はとにかく儲けるだけだった IT 企業を、かなり優秀な人達がやりだして、文化と地方、そして農業に対して極めて興味を持って妻有に関わりだしていることです。そういう企業が今いろいろな場所に関わろうとしている。ただ、そういった企業も大地の芸術祭全体のスポンサーはやれない。カバコフの「棚田」はベネッセさんがスポンサーになってくれているのですが、誰も「Yahoo!ドーム」みたいには言ってくれないわけですね。いわゆるネーミングライツはここでは通用しません。だから、作品や施設ではなく、エリアであれば、企業も少しは関わられるのではないか、と思ってやっています。

これまで「東アジア芸術村」というのをかなり意識的にやってきました。ご存知のように日本海は、政治的にも環境的にも相当厳しい海です。しかし、遼東半島、山東半島から、ずっと香港、あるいは台湾までのアジアというのは、共通の文化圏だったわけですね。そこをどう繋いでいくか、これはやはり新潟の役割だと僕は思っています。ものすごく丁寧なフェイストゥフェイスの繋がりを意識的にやろうと。だから、来年、中国のアーティストが相当入ってきます。全体をまとめるのは、香港大学が中心になってやります。その国の一級の文化財団などと一緒にやる。それも、私達がお金を全額払うのではなく、半々でやろうという条件にしています。これまでのように日本が全部お金を出してやる、ということはやれないし、やらないと。それでも、みんな関わってくれて、ありがたいですね。小豆島にある福武ハウスと連動したものもあります。全部を繋いでいこう、というやりかたです。

私たちがやっている取組は、7月の海の日あたりから始まるものが多いですね。そうすると残念ながら、東京近辺ですと、7月に試験がないのは、筑波大学だけなんですね。他はみんな試験期間なんです。僕は、サポーターに来る人たちは勉強しない奴らだと思っていたら、大違いで、みんなちゃんと勉強して、試験・レポート出すんですね。驚きました。そこで、人手がないということで、香港大学・上海大学が助っ人をやろうという形で関わりだして、交流も増えてきています。

今回の芸術祭のもうひとつの課題はパフォーマンスの充実です。十日町市と津南町が、芸術祭のために出すお金は、3年間で1億円なんです。この1億円は、メンテナンスで消えちゃうんですね。雪国の中でこれだけの作品を維持するというのは、大変なんです。頑張ってくれているんですが、作品のメンテナンスをこれ以上やれない。すると、もうパフォーマンスしか手がないぞ、これを徹底的にやろう、充実させようということですね。津南の旧上郷小学校では、豊岡から学んで、城崎温泉まではいかないけども、廃校をパフォーマンスのレジデンスにしようとしています。これも都市にないもの、みんながまとめて合宿できる、いろいろな関わりを地元とやりながら、それを一ヶ月あるいは3週間やれるような仕組みにしよう。本番は、東京芸術劇場でもいいですが、ゲネプロぐらいは地元でやっていってくださいよと、いうことで成立させようとしています。

瀬戸芸をやりながら、瀬戸内というのは、日本の縮図だなあと思いました。日本列島の面積は世界で61番目でありながら、外周は6番目なんですね。これが、日本の特徴なのです。ユーラシア大陸から見ると、太平洋に面した環礁ですね。つまり、太平洋の窓口であると。だけど、これが特質であり、歪みになってしまった。ダンテの「神曲」に出てくる「ヘラクレスの柱」の外が断崖で海に落ちているのと同じように、私達は太平洋を「いい海」に変えなかった。向こうにある太平洋に対する決定的な無理解が、現在まで続いているわけですね。これが日本の文化を相当特色づけてしまった。いろんな意味で、これは考えねばいけないことです。

そしてイブの子孫がどのように日本に渡ってきたか。これがやはり重要なことなんですね。今、地球上にいる70億人は、17万年前に戻れば、一人の女性にいきつくわけですね。つまり私達は、同じ遺伝子をもちながら、いろいろな土地の中でどのように生きるかということだけで、変わってきただけではないか。だからこそ、ひとつひとつの場所がいろんな意味でかけがえのない場所になるのです。

最後に一言申し上げますが、安藤忠雄さんの建物の魅力を僕は全然わからなかったんですね。しかし、瀬戸内に通ううちにやっとわかりました。安藤さんの建物というのは、瀬戸内の空と海を輸入する、輸送する仕組みだったのです。アートも同様で、普通の夏の海や場所に、作品が入ることによって、光と影、あるいは言葉を与えるものなのです。これが今のアートの役割なのです。そして、新しいものを使って新しい価値を作る。豊島では農業と共にやっています。もともとあった自給自足の農業を1つの目標にしようとしているわけですね。みんなあるものをつかってやってきました。男木島では、休校になった学校を使って会田誠とか、一番危ないアーティストたちがスクールをやったのですが、そこに男木島を出た人たちが子どもを連れて見にきた。そうしたら、子どもたちがこういう島で生活したいと言い出して、本当に戻ってしまったんです。その報せを僕は外国にいるときに聞いたのですが、「こんなことがありうるのか」と僕は思わず叫んでしまいました。そして、学校がオープンになり、三十何年ぶりの開校式が行われたのです。

あともう一つ。私たちはできあがったものしか見なくなっていました。モノを作る場面というのが、私達の生活のなかから失われました。そこで、ちゃんともものを作る現場を出来る限りつくって
いこうということで、バングラデシュ・プロジェクトというのを昨年の瀬戸内国際芸術祭でやりました。
バングラデシュは、世界で一番貧しいと言われていますが、ワーキングシェア世界一です。そして、
餓死者がいません。それをちゃんと学ぼうと、職人やパフォーマーたちに来ていただいて、「ベンガ
ル島」というのをやりました。

瀬戸芸では、横浜の BankART1929 が、昔日本にいい影響を与えた朝鮮通信使をもう一度新しい形
でやっていこうというプロジェクトをやっています。台湾のアーティスト、林舜龍は、巨大な椰子
の実のようなものを海から運ぼうとしたのですが、いくらなんでも危険なのでやめましたが、私達
の先祖がどういふうにして海を渡って交流していたかを辿るようなプロジェクトをやりました。
方々でこういう動きが出てきています。

瀬戸内の典型は、大島です。大島はハンセン病の元患者さんたちが住む島です。100年間ハンセ
ン病患者を隔離してきた「らい予防法」が、1996年に廃止されましたが、ほとんどの人たちは故郷
には帰れません。今も島に生きる人たちの希望は3つあります。ひとつは医療生活面で現
状がきちんとキープされること。もうひとつは、ここで生きざるを得ない、だけど、ここで生きてきた
記憶・記録を残したいということ。もうひとつは、皆さん、お子さんはいませんが、将来ここが子ども
たちが遊ぶ島になってほしいということ。そういう夢を見たい。この希望に沿いたいと思っています。
そこで、この大島の土で焼いた器を使ったカフェをつくりました。これは断種のための屈辱の
解剖台です。芸術祭に参加することになって、元患者さんたちが海から引き上げて展示しました。
これは、今から50年位前でしょうか、初めて島の周りで魚釣りをすることが許可された時の船を探
し出してきて展示したものです。

大島を、将来子どもたちが集まっているいろいろなことがやれる島にしたい、ということで、今準備をは
じめています。そこでは、世界のいろいろな子どもたちを、だれでもいいから受け入れる。そして何
があっても守っていこう。そしてものを作ろうということ、ちゃんと高らかに謳い、旗を振る。大島
がある高松市は、創造都市に名乗りをあげています。高松市は大島をちゃんと立ち上げるとい
うことをやろうとしているわけです。

美術・芸術というのは一人ひとりが全員違うんだということ、をささやかながら目指しているジャンル
です。他のジャンルは、正しいとか、速いとかに価値が置かれる。だけど、みなさん記憶にあるで
しょう。美術だけは人と違って褒められることがある科目なんです。つまり美術の思想的基盤とな
っているのは、人間が全員違うんだということですね。違う人たちが共存している中で、どうやるか
ということだと思います。今のように同質化が求められる時代、まさに、美術・文化というのは、自
然とちゃんと対応できる、いろいろな意味での柔らかさだろうと思うのです。今日はどうもありがと
うございました。

横浜市 田邊氏

横浜市文化観光局創造都市推進課の田邊です。どうぞよろしくお願ひいたします。

横浜市の中では横浜トリエンナーレを、創造都市政策のリーディングプロジェクトという位置づけで事業を展開しております。今のリーディングプロジェクトということ念頭に置いていただいて、これまでの歴史を振り返りたいと思います。

横浜トリエンナーレの始まりですけれども、細川政権当時の諮問機関が現代アートの国際美術展を日本でもやっていくべきではないか、という話が出たことを発端に、その後1997年に外務省から国際美術展の定期開催方針が出されます。そして、外務省の外郭機関である、国際交流基金が、開催地を検討するというので、公募することとなったのですが、その中で他の都市とともに横浜市は声を掛けられていました。ではやりましょう、とすぐには行かなくて、当時の横浜市議会において、開催の賛否について、だいぶ議論をしまして、この頃は、2002年の日韓ワールドカップをスポーツの大きなイベントとして横浜で実施するという話をしている時期でした。街の発展を考えた時に、スポーツだけじゃダメでしょうと、文化的な政策をどのように実施していこうか、という時に、このワールドカップとトリエンナーレ、スポーツと文化の国際事業に取り組むことで議論がされてきました。

当時の議会で議論された内容を見ると、横浜は外国文化の受け入れ窓口として、港を中心に発展してきており、そういう横浜という都市が持つ、進取の気風、これが現代アートとあっているだろうという関係者の共通認識が次第に作られていき、新たな横浜の都心部活性化のソフト計画ということで、このトリエンナーレが位置づけられています。

横浜市は、都市デザインのみちづくりをかなり先進的にやっております、こういうこととも関連してトリエンナーレをやっていくと、いうことで議会の承認も得て、ぜひ横浜で国際的な現代アートの美術展をやりたいと、手を挙げて横浜トリエンナーレが始まったという経緯があります。

組織体制としては、横浜市と国際交流基金、あとメディアでアートや文化に強いNHK、朝日新聞社の4者によって、トリエンナーレの組織委員会を構成して実施をしていくことになりました。

まず横浜トリエンナーレが2001年に初めて開催されます。当時は9月から11月、秋にあわせて開催していました。会場は、海沿いにあるパシフィコ横浜の展示ホールと、赤レンガ倉庫1号館。赤レンガ倉庫は当時、これから商業施設、文化施設として活用していこうという時期で、いわゆる休眠施設を活かしてやろうじゃないかという議論が当時されていて、実際に、横浜赤レンガ倉庫を事業オープンの前に使ったということでございます。ちなみに、当時象徴的な作品であったこの「飛蝗」という作品が、横浜にあるインターコンチネンタルホテルの壁面に宙吊りになった状態で掲げられて、かなり話題になりました。当時、私は学生だったのですが、正直当時現代アートについては大変疎く、何も知らなかったんですけども、この作品があったことは、すごく記憶に残っています。

そして、展覧会ですけれども、オノヨーコさんの作品が、美術館の中だけではなくて赤レンガ倉庫にあるとか、内水面と我々が呼んでいる運河に当たるようなところがみなとみらいにはあるんですが、そちらに草間弥生さんの作品を設置しました。いくつか他にも作品を設置して展開をしていました。当時の主会場が、地図上で赤丸がついている二箇所ですね。

2001年の時には、横浜市では創造都市政策が策定されておらず、2004年にスタートします。創造都市政策というのは、まちづくり政策で、文化芸術の創造性を活かしたまちづくりですよ、ということで始まりました。つまり横浜が持っているソフトもハードも含めた資源を活かして推進していくということで、文化芸術創造都市・クリエイティブシティ横浜の推進をしようと。これは横浜全域を対象としていません。バブルの時に整備された土地を活用して、みなとみらいに企業を誘致し、建物を建てて市を活性化させようと頑張っていた時期だったのですが、そこに注力をしすぎたために、昔からあった関内と関外と呼ばれる地域の人やオフィスが減少、地盤沈下を起こしてきます。この地域の活性化を今度はクリエイティブシティ政策を行う中で、またやっぺいこうじゃないかと言う話が出てきて、創造都市政策に位置づけられ、展開をすることになりました。

政策ができた後の横浜トリエンナーレ2005は、9月から12月までの開催期間でした。この時は、山下埠頭、を使っております。当時は、まだまだ景気が下火の時に、山下埠頭にある倉庫が空いている状態だったので、そこを使ってやりました。この時も、山下埠頭にある倉庫を使用しているんですけども、西野さんの作品は、中華街のど真ん中で、外から見るとプレハブなんですけれども、ホテルを作るといことをやっております。あとは、埠頭という形を活かして、埠頭のアプローチの中で作品を設置したり、ルック・デルーの作品は、山下公園に設置して、会場の中だけではなく、外でも作品を設置して展開していくことをやっています。

2005年が終わると、2006年にナショナルアートパーク構想が発表されました。世界水準の文化芸術活動の創造発信をこのエリアでやっぺいこうということや、都心臨海部を今以上に市民に親しまれる場にしようという内容です。この構想は、港や海が関係する場所というのは、様々な規制などが存在し、一般の方が入れない状況となっていることが多いです。文化芸術の力を活かして、ぜひ市民の方々、観光客の方々にこれらの場を訪れていただいて、活性化をしていこうと、いうことを構想の中では考えています。この構想が出た後、ヨコハマトリエンナーレ2008が開催されました。この時は新港ピアという、ヨコハマトリエンナーレ2014でも使っている会場をトリエンナーレのために建設し、この他に、現在 BankART Studio NYK として活用している日本郵船海岸通倉庫、横浜赤レンガ倉庫と、三溪園という、原三溪という人が公開した庭園を会場にして、トリエンナーレを展開しています。近隣にある、神奈川県立博物館の階段を使った大巻さんという作家の屋外作品であったり、みなとみらいにあるランドマークタワーの吹き抜け部分にも三菱地所さんの協力をいただき、設置しました。

この後、組織体制が大きく変わります。事業仕分けで国際交流基金さんが外れることになり、組織体制が変わって、横浜市が主に運営制作の場に強く関わっていくことになりました。NHK さん、朝日新聞社さんはメディア事業者として、引き続き組織委員会に入っていただいているという形になりました。

これは、横浜市側が解釈していることですが、国の位置づけとしては、今まで、主催者の一員として事業の運営の資金拠出を国際交流基金さんがしていた。その後は、2011 年に向けて

文化庁さんが支援をしてくださるというスキームに変わります。運営に関する関与は、国際交流基金さんの方が非常に強かったんですけども、文化庁さんに指名型の補助金で支援していただくことで、政策的な位置づけがすごく強まったんじゃないかという風に捉えています。こういう変遷があるなかで、ヨコハマトリエンナーレ2011が、開催されます。主会場は美術館と日本郵船海岸通倉庫を使ったのですが、周辺を含み街全体が会場という考え方をはじめて打ち出しました。2001から2008までも、既にまちなかでも作品を設置していましたが、創造都市政策の中で、様々な方が関わって、トリエンナーレ一緒に盛り上げていたのですが、具体的に周辺を含み、まち全体が会場という考え方でやりますよ、と打ち出したのがこの時です。

2011年展でも、今まで、会場となってきた都心臨海部とナショナルアートパーク構想の領域と重なっています。世界水準の文化芸術活動の創造発信をこの界隈でやりますよと、都心臨海部を今以上に親しまれるようにということで、まさにトリエンナーレは、これを会場という切り口で示し、実際に行っています。

このヨコハマトリエンナーレ2011に連動する形で、OPEN YOKOHAMA という事業を展開します。この時は、関内・関外地区、いわゆる創造都市政策の対象としている地区であり、ナショナルアートパーク構想でも対象となっているエリアを中心に、市民の方々、普段活動している方々とともに、トリエンナーレをやっている期間に、みなさんが行っている事業をまとめて紹介し、一緒に発信をしたり、事業を展開したりしませんかということ、声掛けをして、一冊のガイドブックを作成しました。これをトリエンナーレに来ていただいたお客様全員に配布をして、市民力・地域力を活かした新たな魅力を発信し、にぎわい装置として具体的ななしかけをしました。この取り組みの中には、トリエンナーレ会場のガイド役の方の体制を高め、地域情報の提供をすることで、地域経済の活性化も図りたい、ということ具体的に展開しました。OPEN YOKOHAMA は、前年から実施しており、2010、2011、2012と三年間実施しました。実際2011年はトリエンナーレ会場だけでなく、創造都市政策で事業を普段から展開している黄金町エリア、あとNPOのBankART1929さんに、新港ピアという2008年展で使った会場を活用していただいて、これらの場所に無料バスを走らせて、お客様ができるだけ会場間を回遊しやすいように、回遊性を高めて、まち全体が会場になっているんですよ、ということを感じていただけたかと思います。創造都市を、トリエンナーレを、ぜひ楽しんでいただきたいという考えを具現化したものです。

今回のヨコハマトリエンナーレ2014では、OPEN YOKOHAMA の取組がある程度地元で根付いてきたと考え、同様の取組をあえて行うことはしていません。ですが、100を超えるようなプログラムが集まっており、まち全体で、トリエンナーレと一緒に盛り上げていこうという機運が高まっております。今回は8月1日から11月3日までです。主会場が美術館と新港ピアの2箇所。今回は屋外設置の作品だけでなく、横浜市の創造都市政策の中で創造界隈拠点という、普段から活動している5つの拠点全てと連携を初めて行いました。今年は、東アジア文化都市事業と絡め、期間中にトリエンナーレとも連携し、として、大きなアートプロジェクトを展開しています。

横浜では、トリエンナーレが無い年も、様々な事業を展開しているのですが、3年に1度のフックとなるような形でトリエンナーレを展開しています。

まとめとして、トリエンナーレは、創造都市政策=横浜のまちづくりを体感してもらう場。2つ目に、これからの横浜の都市の可能性を導き出す。これは、会場などに現れています。今まで、なかなか使われていなかった場所を活用していきたいということ。3つ目は、地元の方々も含めて、創造都市政策推進のきっかけづくりの場とする。これをトリエンナーレ・創造都市の関係として、位置づけ、展開しています。

BEPPU PROJECT 山出氏

別府温泉というのは、全国でも有数の温泉地で、温泉湧出量毎分8万リットル以上、源泉数2508湯、これは日本の10分の1の源泉があるんですけども、そのようなとも資源のある街で活動させていただいています。2005年に BEPPU PROJECT という NPO を立ち上げました。今日は、いずれも行政の政策の中でどういう形で創造都市が見えていくのか、という話がある中で、我々はあくまで民間のひとつの小さな NPO から始まっているわけです。もちろん今行政の方々とも深い関係がございますけれども、個人的には、小さく産んで大きく育てていきたいと思っているのと、もう一つは、色んなところで連携しながら進めていきたいという思いがあります。2005年に活動を始めて、来年10年ということで、様々な活動を行っています。芸術祭のようなプロジェクトだったり、学校でも授業を作っていますよということがあるんですけども、実は結構我々がやっている活動の範囲は多岐にわたっていて、ビジネスマッチングというか、大分県の新たなブランドを作っていくような事業を大分県と共に進めていたりとか、どちらかというと、今ある産業にどうやってクリエイティブな考え方が入っていけるか、ということを進めていることが多いです。もちろんそれと共に別府のまちづくりを進めていくわけなんですけど、我々 BEPPU PROJECT も中心市街地活性化の協会の一員となっています。別府駅から5分位のスペースに中心市街地があります。ここに、プラットフォームと呼んでいますけれども、まちの中の文化的なスペースを作っています。全部で8つありまして、空き店舗を活用して様々な団体さんがそこを運営していく、稼働していくような場所を作っていく。色んな実験を重ねてきて、今年で7年になります。当初は4年程度で事業を終わらせる予定だったんですが、地域の、特に商店街からの継続してほしいという声が上がって、今でも1つの事業として行われているわけです。

こういう場所で、今まで活動していなかった、例えば竹工芸の職人さんのスペースがまちに出来たりだとか、それを子どもたちが見に来てくれたり、ワークショップを通じて、子どもたちが竹細工を作っていく。ちなみに、別府は竹工芸が大変有名な所で、日本で唯一竹工芸の職業訓練学校がある県です。それから、高齢者たちが地域の子どもたちと一緒に何かしようという3世代交流サロン。だいたいこういうことは、計画に上げると通るんですが、うまく成功した試しがないと思って、そこのおばあちゃんたちが試行錯誤するけれども、どうやっていいかわかんない。そこで、自分たちの得意なことをやろうと、要らなくなってきた洋服だとかをもらってきて、そのほつれを直して修

繕して、クリーニング・シミ抜きをして、それを安く100円とかで売って、だんだん子供服が増えてきて。それを売ったら、子どもたちが来てくれて、その子ども達がおもちゃを忘れていって、それを、また次来る子どもたちのおもちゃと交換する。もちろんこれは僕が教えたわけじゃなくて、おばあちゃんたちが勝手に始めている活動が生まれたりします。何がやりたかったかという、回遊拠点としても位置づけているし、地域の活性化、商店の活性化という位置づけもあるんですが、どちらかという、今まで外で活動していた方が、まちの中で活動を始めていく1つのきっかけになる。さらには、そのお客様が世代も違っている、目的も違う方々が、こういう施設の運用を行っていくということを行いました。

今、我々がアパートを運営していたりとか、別府という温泉地ならではの、多分日本で唯一ストリップ劇場跡地を運営しているのはうちだけだろうと思いますけれども、こういうスペースができてくると、例えば、東京の芹沢高志さんのP3という会社がレジデンススペースを持ったりとか、オルタナティブな文化的なスペースがまちに生まれてくるようになりました。こういう活動の1つの紹介をしていくと、platform04という場所があります。これは、うちが運営しているセレクトショップで、全体のコンセプトは僕が作って、市の補助金、を中心市街地活性化協議会にいただいて、そこから家賃を払ったりとか、工事をして、リノベーションをして、こういう場所を作っていきます。なるべくハードにお金を掛けたくなかったのですが、100年を超える古い建物で耐震見極めが大変厳しい状況でした。実際にこの建物のリノベーションは300万円を上限としておりますけれども、耐震が非常に厳しかったのが、今は新築並みの耐震基準になっているという建物で、結構作られた当時は、建築の方々が見に来られてました。その場所を地域の竹工芸とか、この場所でしか購入できないような商品を販売する拠点として運営しています。まだまだ主力の商品としては、ここだけでしか買えるものは7割ぐらいしかありませんが、ただこういうことをしていくと、地域の様々な相談が入ってくるんですね。例えば、九州というのは南国なので、ここははずいぶん違うもともと亜熱帯のような感じなのですが、ザボン漬けとかが有名なんですね。ザボン漬けというみなさん知らないと思いますけれども、とても大きな柑橘類の皮をシロップ漬けにしていく。それをA4の袋いっぱいゴロゴロ入れて、砂糖がついているようなお菓子です。それを1000円とかで売りますよね。駅のキヨスクとかで売っていて、でもほとんど今買われているのを見たことがないし、こういうお店がどんどん無くなっていく中で、どうしようか、と。そして、生産者の思いをちょっと聞くと、ザボンをちょっと煮出しを長くすると深い色になるんだとか、砂糖を多めに入れるとちょっと黄色の透明度が上がるんだとか、色んな話を聞いて、すごくそれを楽しそうに語られている。じゃあそれをそのまま商品にしましょうということで、煮出しを長くしたものを琥珀という名称で小さなパッケージに5本くらい野菜スティックのようなものが入っていて500円で販売しているんですけど、今うちのショップのかなり中心になってくれていて、大体、2つ3つ、一人の方が購入してくれます。つまり、1000円のパッケージは売れないけども、こういうパッケージにすると売れる。そういうものが育っていて、今創業七十何年で、今まで家族だけで経営していたところに、2人くらい雇用が生まれ、うちの担当職員は季節ごとに焼き肉をおごってくれるようになって、うちの団体にも貢献してくれています。

右の指輪は柘植細工なんですね。別府は、温泉地で、昔は新婚旅行のメッカでしたから、柘植細工が多かったんですね、柘植は大変硬い素材なので、固い絆ということで、みんな買っていったんですけども、今の若い子はいかんざしを挿すこととかなかなか無い。だけど、こういう指輪を作って一個 1,000 円くらいで試してみて、だんだんみんなが飽色になっていくということを感じる。僕は実際売りたいのは、ブラシなんです。一個1万円くらいするんですけども。静電気は一切起きないですね。女性の皆さまいかがでしょうか。言っていただければすぐに紹介します。

こういうことを紹介するための情報発信のためのツールを作っていて、「旅手帖 beppu」です。これも今不定期で刊行しております。来年の4月に、また「旅手帖 beppu」を作ります。無料配布していきまして、これは、一切広告を入れないというビジネスモデルになっていないようなビジネスモデルなんです。アートイベントと商品の購入、温泉の入湯、まちでの飲食など、お得に使える金券を発行して、だいたい制作費の8割をそれでカバーできるということになっています。

こういう活動を通して、今一緒にやっているのが、大分県全体の商品のブランディング。特に商品の主原料が大分県産のものに限るということですが、色々見ていくと、お酒なんかもう麦焼酎が大変有名なんですけれども、その麦も日本で購入していないんですね。アルゼンチンとか、そちらのほうが質がいい、安いということがあるかもしれない。でも、それを麦畑からしっかり作っていきこうよと。日本酒も、そうやってコメからしっかりいいものを作っていきこうよと、ということを進めていくために、一つ一つの個性を逆に無くして行って、大分県全体としてブランドを作っていく。例えば、かぼすっていう柑橘類の箱が見えます。その上はお米なんですけれども、その地域独自の文化や技術を持たれている方々を紹介するためのツールとして、こういう新たなブランディングを立ち上げています。

あとは、アパートも運営しています。これはアーティストのためのアパートで、家賃1万円です。4畳半の部屋を2つつけて、流しも共同、トイレも共同。人が住めるかなと思ったら、若い子たちがみなさん楽しんで住んでくれていて、今毎年8名の方がここに居住しています。我々としては、ここで利益をあげようとしているわけではなくて、しかも行政から補助金が入っているわけではありません。けども、すごく小さなコンパクトなモデルで自立していきたいということがありました。アーティストたちは、家賃が安い分それだけ色々な活動が始まります。例えば、地域の子どもたちに対するお絵かき教室とか、障害者施設で何か一緒に運動するとか、色々なことを始めてくれています。こういうアーティストが全く住んでいなかったの、僕らとしては、色々なお仕事を発注していききたい。ワークショップなどを一緒にやっていきたい。そこから生まれたのが、別府のまち中のケーキ屋さんがクッキーを作っていて、それを他のところと少し差別化したいんだよね、ということで、アイシングした上に砂糖で絵を描きました。そういうプリントする技術で、このアパートに住んでいるアーティストに絵を書いてもらって、オリジナルビスケットを作りました。通常1枚100円で売っていたものを、今1枚200円で売っていますけれども、これ結構売れていてですね、今もう4クールとかになっているから、もう3,000枚とか4,000枚とか売り上げている。こんな活動を年間200くらいやっているんですよ。とっても小さな単位のワークショップだとか、色々なことをやっています。こういうことがまちの中に、色々な影響を与えているのだと信じています。例えば、駅の高架下で全部で

12店舗くらい入るのかな。とても小さな商店街。けども、ほとんどが空き店舗だった。うちの事務所はこのすぐ近くに3年前に引っ越して、うちのスタッフ女性ばかりで、この通りを通過して駐車場に行くのも、みんながあんな暗い通りを夜通らせて、どうするんだ！と僕を攻めるんです。けれども、ある僕らの友人が喫茶店をしないと、じゃあうちの社食として使うから、どんどんやってよと、JRさんに話を安くしてもらって、ギャラリーみたいなことを始めたら、色んな方々がそこに入るようになって、だんだんみんながそこでワークショップをすとか、週末ごとにずっと定期的に色んなイベントを開催することで、今ではメディアとかで取り扱ってくれる。もちろん空き店舗は無い。ここもまた行政の文字が一切入っていないという場所に育っています。僕はなんにもここはやっていません。ただ社食が欲しいといっただけです。

こういうことをやりながら、3年に一度混浴温泉世界という芸術祭を開催しています。これは過去のプロジェクトですけれども、我々としては、今日、僕の大先輩というか、ずっと背中を追いかけて育ってきた、北川フラムさんがいらっしゃるので、こういうことを言うのは恥ずかしいんですけども、僕はプロジェクト数をできるだけ少なくしたいと、いつも考えています。それよりも、プロジェクトを通して、まちをどうやって出会うか、というのが我々の BEPPU PROJECT としての考え方なので、混浴温泉世界も数を絞っていくという志向性が強くなっていきます。そういう中で、越後妻有のようなアートの宿でも、我々の資金ではなくて、こういう活動を応援するという市民ファンドを作り、土地を購入し、建物のリノベーションだとか、作品の制作というのも、そこが出していくというように、全く今回初めてアートを所有するようになりました。この芸術祭、1億ちょっとで行うんですね。別府市からの負担金というのはいざい4%くらいなんです。大変厳しい中でやっているんですけども、だいたい12万人くらい、前は来ました。同時にやっているイベントと合わせると17万人。どういう方が来ているかというのと20代、30代の方、特に女性が多い。6割型県外で、ほとんど1泊もしくは2泊という状況です。これが3年に1回。それと、毎年行っているものとして、別府アートマンスというものをずっと行っています。2010年から始めて、パンフレットを作り、Web サイトを作り、そこにイベントの紹介をしますよ、別府は毎年11月が BEPPU アートマンスですよ、ということ僕らは勝手に決めて運動しています。当初20団体、27団体くらい参加してくれているんですが、去年が74団体、今年はなんと88団体。100近く。全く助成金など一切お金を出していません。紹介をするだけです。こういう活動を見に来られる方、それも女性が多いんですけども、ご高齢の方も結構多くなっています。つまり、このイベントに参加される方、このイベントを作られる方々は結構高齢の方が多くて、フラダンスをするおばあちゃんたちも75歳で、毎年参加してくるんですけども、その方たちが自分の友だちを呼んでくる。今までなかなか県外の客層にアプローチできなかったのが、我々ではなく、彼女たちがアプローチしていくという、プログラムを行っています。

最後駆け足で申し訳ないですけども、今まさにこの秋に開催する芸術祭、「国東半島芸術祭」があります。1300年前に仏教が入ってきて、神道という、神と仏、神仏習合の場所として知られている場所。上から見ると頂点に二子山という702mの山があるんですね。全部谷でできていて、つまり火砕流なんです。火山の場所。隣の集落へなかなか行けなかった。だからこそ、その集落

ごとにお祭が残っている。修正鬼会とか、有名なお祭りが残っていて、仮面をつけた鬼が各家々を巡っていくんですけども、バックをみていくと、こちらは、仏壇・こちらは神棚なんですね。大体1件でもこのような形で残っています。このようなエリアで今アートプロジェクトを行っています。登山に非常に近い考え方で、どのルートから、どの山を目指していこうか、というルート設定をして、作品とも出会うんだけど、その場所と歴史なども出会っていく。このコースは、岩山の下から上まで登って行くんですね。だいたい1時間半で着きます。その上には、このアントニー・ゴームリーの彫刻が設置されていて、これは宗教行事で使われる道なんですね。これは大変今物議を醸していて、反対運動も起こっていて、ずっとそれを今説明会を重ねているところです。こういう場所を地域の方々、おばあちゃんたちが守っている。ボランティアさんも全国から集まっていて大変ありがたいんだけど、ずっとこの場所を守っている地域の方々が、どうやったら元気になるかという考え方。このおばあちゃんたちが、それを守っていくという、ちょっと違うボランティアの在り方というか、地域での守り方というのをデザインしようとしています。

その他に、これはプレ事業で行った一日12時間かけて1つのアート作品を体験する、飴屋法水という方のバスツアーで、一切観光地などに行かない、ミステリーツアーのようなものですが、これもまた秋に開催いたします。全部高さが30m以上あるこういう岩肌、に宮島達男が、現代の磨崖仏を作ろうとしています。また、川俣正が、地域の方々と協同しながら、ある山に通路を作ろうとしています。こういう活動が、大分県の色んなところで起こっています。国東半島は今年から始まりがあって、今、別府のまちなかで壁画プロジェクトというものが始まろうとしています。これも僕がディレクションしていますが、「Oita Made」、先ほど言った商品開発があって、来年の春には大分県立美術館がある。隣の大分市は水族館が、アートの水族館としてリニューアルします。そして、混浴温泉世界が来年の夏に開催されて、同時に大分市では、トイレのみを会場とする、おおいたトインナーレがあって、これもちょっと僕が関わっていますが、結構これ困っています。もう一つ大分県では鶏天、鳥の天ぷらというものが郷土料理なんですけれども、何を間違ったか、じゃあ次は、トリエンナーレっていうアートと鶏天の融合だっかってやっていて、ほかにも、色んな地域で我々のプロデュースじゃない活動も始まっています。これらを全体を繋いでいく冊子を作っていくながら、全国の方々に紹介する。しかし考えてみたら、大分県の在来線、JRの在来線の駅ごとにこういうアートプロジェクトをかける地域というものが始まっているので、ぜひ、JRさんに今話しをしているのが、JRのトレインナーレというね。トリエンナーレ、トイレンナーレ、トリテンナーレ、トレインナーレ、どれがどれだかわかんなくなっちゃってきて。こういうことを通して今まで一泊二日のモデルを、二泊三日、三泊四日のモデルにして、地域に貢献したいと思っています。すみません、早口になりましたが、ありがとうございました。

札幌市 酒井氏

今ご紹介いただきました、札幌市創造都市推進部長の酒井でございます。どうぞよろしく願いいたします。国際芸術祭と創造都市さっぽろということで、短い時間ですが、3つ、創造都市さっぽろの経緯、ユネスコ創造都市ネットワークについて、そして、札幌国際芸術祭2014についてという

ことで、簡単に経緯をお話させていただこうと思っておりましたが、実はこれからお話する話は、さきほど上田市長が、順序立てて丁寧に説明をいただきましたので、今度は絵付きで、再度復習をさせていただく、そういうようなことになろうかと思えます。本当は、上田市長には、別な原稿を渡していたのですが、全く。その辺はご容赦頂きたいと思えます。よろしく願いいたします。

創造都市さっぽろの経緯ということで、これも、そのまんまなんです、1869年に開拓使が設置されて以来、札幌市の人口というのは、戦争の時の一時期を除いて、ほとんど右肩上がりでした。この1、2年のうちにおそらくピークを迎え、20年後の2035年には、よくて1%くらいの減少傾向になってしまうだろうということが予想されています。こうした少子高齢化人口減少の進行ということで、生産年齢人口がずっと減っていきますので、そうした中で持続可能な社会を目指すにはどうすればいいのかということで、やはり経済的にも札幌圏外からの財貨の獲得と、そうした付加価値の高い製品なり、サービスを生み出すための創造的人材の獲得が必要となるだろうと、それが課題だという認識を持ったところがございます。そのためにはどうするのか。札幌の魅力は、様々な言われておることはございますが、こうしたようなものを一層磨きをかけて、札幌を1つの商品のように強力なPRと情報発信をするということが今後必要となってくるだろうと。いわゆる札幌という都市自体のブランド化というのが必要になってくるだろうという認識のもと、2006年の3月に、創造都市さっぽろ宣言をいたしました。創造性に富む市民の力で、国内外との交流によって、新しい産業・文化を産んでいくまちにしようと、札幌は文化芸術を大切に、創造的な産業というものを活性化し、創造的な人材をどんどん産んでいきますよ、ということを内外に向かって宣言をしました。それと合わせまして、2008年の11月には第二回目の文化庁長官表彰、文化芸術創造都市部門の表彰をいただきました。これには、3つの評価ポイントがあったと聞いてございます。1つは、音楽ホールのKitaraや、大規模な文化芸術施設の整備、PMFと呼んでおります国際教育音楽祭などのイベントの継続的な開催といったようなことが、評価の対象となったと聞いております。2つ目は、札幌市はずっとITコンテンツ産業の振興をやっておりまして、特にコンテンツ産業の担い手育成には、力を注いで参りました。そして3つ目。札幌市立大学を開設し、デザイン学部を設置し、教育研究による人材育成にも力を注いでいる、という、それら3つが大きな評価ポイントになりました。これは札幌市としては非常に大きな励みになりました。そこから、より一層、この創造都市というコンセプトをまちづくり全体に進めていこうということで、有識者と市民の代表からなる、創造都市さっぽろ推進会議を2008年度に立ち上げて、この中で様々な、今となれば非常に重要な提言を2009年の3月にいただきました。ユネスコの創造都市ネットワークにぜひ加盟をすべきではないかというのが、1点目。2点目が、国際芸術祭についてぜひ検討するべきだと。3つ目として、毎年恒常的に国際会議、創造都市間交流の国際会議イベントというものを展開していく必要があるだろうと。そして、4つ目は、創造的空間として、札幌市に縦横に走っている地下ネットワークを活用していくべきだろうという提言をいただいております。これらを、強力に推進していくために、市長の強力なリーダーシップ、とともに、産学官に拠る推進体制というものを作るべきだろうと。この5つの提言をいただいたところでございました。

そして、ユネスコの創造都市ネットワークにつきまして、登録を目指した努力をこの年からすることになりました。ユネスコの創造都市ネットワークは、2004年に設立したもので、その設立の背景には、世界的な急速な経済のグローバル化があったと言われております。電気製品や車などの製品だけでなく、映画や雑誌といったコンテンツ産業も含んだ文化的なものが、ハリウッド映画のような強力で大きなモノに席卷されてしまうのではないかと、というような危機感がヨーロッパのフランスやイタリア、そういったところに多く広まったということが設立の背景にはあったと聞いております。そして、札幌市は、ユネスコの創造都市ネットワークに何のために加盟するのか、というところですけれども、世界に名だたる、文化都市、創造都市と言われるところとネットワークすることにより、市の交流を期待できるだろうと。そして、ユネスコ創造都市ネットワーク加盟都市ということで、都市ブランドの価値が向上するということが期待できるのではないかと、ということを加盟目的としたしまして、準備を進めてきたということでございます。

現状ですが、7つの分野、文学・映画・音楽・クラフト&フォークアート・デザイン・メディアアーツ・食文化(ガストロノミー)、この7分野で現在41都市が登録をされてございます。世界地図を見ますと、今現状の状況ではアジア地域とヨーロッパに多い状況で、今後はこれを全世界に広げていくというお考えで、ユネスコの方もやっているとお聞きしております。そして、ユネスコの日本の加盟都市でございますが、先輩都市といたしまして、今日のこの会議の幹事都市でもございますが、金沢市さんがクラフト&フォークアート分野でいち早く登録をされておりますし、デザイン分野では、名古屋市さん、神戸市さんが私達の先輩として、既に加盟をされておりました。では、札幌市は何の分野で加盟を目指すのかという議論になるのですが、当時は、ずっとICT産業、コンテンツ産業の振興に力を注いでおりましたし、文化芸術の振興にも力を注いできたというところ、そしてこれまでに1年中を通して、特に大通公園などを、あたかもメディアのように使って年がら年中様々なことをやっている。言ってみれば、都市全体をメディアとして、札幌の魅力を発信していると。そういった意味でもメディアアーツ都市だとなりました。そして、このメディアというのは、様々な産業への波及というものが、期待できるのではないだろうか、というところでございます。加盟を目指しながら、札幌の既存の公園、雪まつりなどに、プロジェクションマッピングをするなどのチャレンジをしてまいりました。特に雪まつりでのプロジェクションマッピングのチャレンジは、市民にとっても非常に新鮮だったということで、雪まつり魅力向上に新たなこうした技術、新たなアートを加える事によって、魅力を発掘できたいい一例だったかなと考えているところでございます。そして、佐々木先生の大きなお力添えもいただきまして、2013年昨年の11月、日本で4番めの創造都市ネットワーク加盟都市になることができました。

そうした流れが今までございました。そして提言の中で2つ目に出てきました札幌国際芸術祭を、創造都市さっぽろの象徴的なイベントとして開催をするということを創造都市さっぽろ推進本部への提言としていただきました。同時に札幌市の文化芸術基本計画を平成21年3月に作りまして、この中でも国際芸術祭の開催に向けた調査を行うということになってございました。平成21年度、22年度は調査を進めまして、23年度には具体的に検討委員会を設置をし、そして、平成24年の6月に札幌国際芸術祭の仮称基本構想というものを策定をし、札幌初の国際芸術祭に開催に向

けた具体的な動きがスタートしたというところでございます。この札幌国際芸術祭基本構想は、当時はまだ仮称でしたが、4つの目的を掲げました。1つは単なる国際芸術展、芸術作品を鑑賞するだけでなく、市民の中にこの文化芸術が、ライフスタイルとして消費されるような、身近なものにしていくというところ。そして、札幌らしい芸術を支える人づくりというものをやっぴいこう、それをまちづくりに繋げていこうということでございます。そして3つめは、文化芸術の力による札幌の魅力を再発見しようと、そして新たに価値創造をいっぴいこう、そして創造都市さっぽろを牽引する多様な人材の集積。全国からそういったことに関心のある方、ボランティアの方々にも来ていただき、観光そして経済の活性化にも繋がっていけば、価値が大きくあるのではないか。このような基本構想を立てたところでございます。そして、具体的に国際芸術祭。この基本構想の中で、テーマは「都市と自然」ということが決定いたしました。そして、ゲストディレクターは、音楽家の坂本龍一さんをお願いしたわけですね。なぜ、坂本さんなのか、ということですが、彼は、命を大切に、そして森を大切に、木を大切にす。そういった坂本さんの社会貢献活動が札幌市の市政方針と非常にいいマッチングをしているということ。そして、メディア都市を目指す札幌として、坂本さんが様々なところ、特に山口情報芸術センター等で、メディアアートに対して非常に深く関わられて深い造詣をお持ちだということがありましたので、坂本龍一さんに第一回はお願いするのがふさわしいだろうということで決定いたしました。坂本さんに関しましては、さきほど上田市長のお話にもございましたが、開幕直前に、ご病気の治療・入院ということで、様々な予定に参加できませんが、その分スタッフがあんばって何とかやっぴいこうということで、一致団結して今進めている所でございます。

さきほど横浜市さんのプレゼンの中に、まち全体を使ってというお話がありましたが、札幌市のこの国際芸術祭も、まち全体を使って芸術祭を展開しようということになりました。出ていますのは、ガラスのピラミッド。イサム・ノグチがゴミの埋め立て地の上に作ったと言われる芸術作品であります、モエレ沼公園という、会場の1つでございます。そして、当時の赤れんが、今は観光地でもありますが、ここにも札幌の歴史的に活躍された方々の作品を展示していると。それと、札幌の昔の大書院と言われたところで、これは大通の一番西の端っこにあるところですが、史料館。ここも会場です。そして、都市と自然の都市の部分の展示室として、近代美術館というところ、そして、南の外れにあります、芸術の森美術館という所で、ここは「自然」に関する展示が担当するところ。そして、このスライドの地下空間の上の方は、チカホと呼ばれております。三年前、震災の次の日にオープンになりました大通駅と札幌駅を繋ぐ歩行者空間でございまして、普段も様々なマルシェや、市民の作品展示が行われており、ここは期間中ほぼ貸切の状態、主にメディア・アート作品を中心に展示してございます。そして、一番下が500m美術館と呼ばれております。元々はかなり殺風景な通路だったんですが、そこにクリエイターたちの作品の発表の場となるような、展示会場とし、今回も、北海道に縁のある作家たちの展示会場として使っていると。このように、札幌市内の幅広い場所を展示会場として活用しているということでございます。

その中で、いくつか特徴的なものを簡単にご説明したいと思います。札幌の新たな価値とか歴史を知る展示という意味もあろうかと思いますが、ここ北大では、中谷宇吉郎先生という、世界で初めて昭和11年に人工雪をお作りになられた方でございます。博士の膨大な研究の資料の中から、

坂本龍一さんとアーティストの高谷史郎さんが、厳選に厳選を重ねまして、非常に美しく特徴的なもの、20作品を展示をしています。天然の雪と、ご自身でお作りになられた人工の雪の結晶。これが両方見られるのが、道立近代美術館でございます。この右には、非常にこの中谷さんを尊敬しているというドイツのアーティストのカールステン・ニコライという方が、人工雪を作るインスタレーションを展示しています。

これは、昔の札幌控訴院、今の札幌史料館の左側に置いているコロガル公園 in ネイチャーという展示でございます、2012年に山口の情報芸術センターの方で作られた作品でございます。この中にはマイクが仕掛けてあったり、LED照明があったりと様々な仕組みがあって、それをどうやって使うか、どうやって遊ぶかということ子どもたちに考えてもらう。そしてワークショップも開いて、どういう風にしたらもっと面白くなるかということ、子どもたちの意見も聞きながら、それをまた改造していくと、いうことを期間中に何回かやるということをやっています。そうした子どもたちの創造性を刺激する作品で、実はここ、山口の情報センターのこの同じコロガル公園の1つとテレビ電話で繋がっております、子どもたち同士呼びかけをしてお話していると。こちら側には札幌の壁を感じるという風鈴があって、それが鳴ると向こうに風が伝わるということで、向こうの扇風機が回るという仕掛けがあって、山口との連携プロジェクトがこのような形で繋がっており、非常に面白い取組になっているなど、今日見て思いました。

そして、先ほどの北の方のモエレ沼公園の展示でございます。ここで「見えざるものが見え、聞こえないものが聞こえる。」という作品が展示されておりました、この2つをご紹介しますと思います。これはプロジェクトシンフォニー in 札幌ということで、これもYCAM山口情報芸術センターとの連携事業でございますが、坂本さんが非常に樹木・森林というものに興味がおありで、木というものは、光合成によって光をエネルギーに変えると。すなわち、光は電磁波の一種ですから電磁波をとらえる天才なんだと。それをなんとかみんなに聞こえるようにできないかということで、樹木の光合成によって微妙に変化する樹液等の変化によってデータが変化し、それをセンサーで微弱電流として捉えて、それをネットワークにして、最終的には坂本さんが音にしてしまうという。ガラスのピラミッドの中の会議室に、11個のスピーカーが設置してあります。これは、全世界、北大の中、札幌市内、道内、それとイギリスだったり、オーストラリアだったり海外も含めて、そのとき時の木の活動状況というものを聞くことができる、スピーカーによって聞くことができるというに「聞こえないものを聞く」と、いうコンセプトの作品でございます。

2つめが、これが見えないものを見えるようにということで、真鍋大度さんという女の子3人の音楽ユニット Perfume の昨年の紅白歌合戦の時の演出とかやられた方ですが、彼の作品でございます、ここに充滿している電波を見えるようにするのかと。例えば、今スマホをいじっていましたが、それによって電波が揺らいで、それが作品に反映されると。80MHzから60GHzまでのどの周波数帯の電磁波がどういうふうに動いているのかということが、美しく見えるということでございます。真鍋大度さんは人間の脳の動きと、都市の電波の動きが非常に似ているのではないかと、そういうようなご興味から、脳が活発に動いている時というのは、そういう脳波も出るし、都市の中でたくさんどういったような電波が動いているのか、ということはどう可視化していくのか。実は、これソ

ニーさんの協力で設置されております、355インチのディスプレイでございますが、4Kのディスプレイです。非常に迫力のある画像でございます。今回の視察の中には入っていませんでしたが、もしお時間があればぜひこちらの会場にも足を運んでいただければと思います。

今回の芸術祭では、アーティスト62名に参加いただきました。ゲストディレクターやキュレーター15名の方々にご協力をいただきました。そして何より、不夜城と言われるくらいがんばった事務局スタッフ、芸術祭初めてで非常に大変だったと思いますが、非常に学びの多かったこの芸術祭の開催準備、今まだ進行中でございます。全く気を抜けないのでありますが、順々に頑張ります。そして、札幌市民1100人の方に応募いただいて、札幌では初めての試みだったんですが、みんなが参加して手作りで盛り上げていこうというところでございます。その他、芸術祭本体ではなく、芸術祭期間中に行われる様々な連携イベントということで、100を超える連携イベントをやってございます。この夏から秋にかけて、アート一色にしようということで、色んな方にご協力をいただいて、この開催にこぎつけています。そして、メディアアート札幌のこれからというところですが、残す所50日あります。我々みんなでさらに盛り上げて、さらに事故のないよう、そして検証もしなくてはいけませんので、検証の準備もして、さきほど佐々木先生からも長官からも、ぜひ続けてくださいねとお話いただきましたので、ぜひ続けられるように、世界から、市民のみなさんから評価いただけるような芸術祭で最後はよかったねとお互いの肩をたたかれて終われるような芸術祭にしたいというのが、今の私の希望でございます。長くなりましたが、ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

佐々木: 私は、様々な世界の都市を見ながら、ハイテク産業だとか、あるいは情報化産業だとか、次代のリーディング産業とまちづくりの研究をしてきたんですけれども、20世紀の終わりから、21世紀にかけて、ハイテク産業とか情報化産業に代わって、多くの研究者がアートの方に関心を移したんですね。それで調べていきますと、ビルバオのグッゲンハイムミュージアムが登場した後、一斉に世界中で現代アートの美術館がどんどんと急激に増えます。今や、都市の必要なインフラとして美術館抜きには語れないほどです。横浜などが始めた現代アートのトリエンナーレも、世界的にどんどん増えている。(実は東京都とかは、以前に一回やってやめちゃったことがあるんですね。大阪も一回やってやめちゃったのです。)

世界的にグローバル化が急激に進んでいく中で、文化が画一化されるということに対して、非常に危惧感を持っている。それで、文化多様性という方向に動く。文化多様性と言う時に、現代アートというものが、それぞれの地域の固有の資源だとか、固有の歴史とかをどういう風に掘り起こしながら、新しい価値を作り出すか。それを、市民・住民にインスパイアしていく、鼓舞していく。そういったプロセスが根幹になるのじゃないかと思って聞いておりました。それで、昨年1月に横浜市で創造都市ネットワークCCNJの設立総会が成功して、CCNJが徐々に日本の中での認知が広がってきて、文化庁もこれを2020年までに全自治体の1割くらいまで広げたいということになってきたのですが、創造都市ネットワークが農村も含めて広がっていく時に、現代アートのビエンナーレ、トリエンナーレのような継続的なアートイベントが、大変大きな力になる。これをお互いに連

携しながら広げていく中で、CCNJのネットワークというものが評価されるということなのかなあと聞いて聞いていまして、そこでのポイントになるのは、予想できない困難が現れる中で、どう乗り越えて継続していくのか、そのための力をどうやって準備していくのか。このあたりを、一番最初に田邊さんの方から、実際にこういうところに汗をかいて、こんな困難があって、それをこういう形で乗り越えてきたんだというお話がいただけるならお願いします。

田邊: はい、横浜市の田邊です。今のお話でいくと2点あるんですね。1つは、大きな芸術祭開催する時にどうしても資金面で大きな資金が必要になるということです。運営もそうですけれども、2011年展の開催に当たって、国際交流基金さんから出していた資金が途絶えると、ということで、どうやって運営していくかと。規模を小さくするのか、もしくは、今までと同じようにやるために、国の協力をどうやって得るのかというところを、市長以下、横浜市選出の方だけではなく、神奈川県選出の国会議員の方も協力してくださって、どうにかして大きな国際的なイベントを継続してやっていこうということになりました。ヨコハマトリエンナーレが、すでに3回実施されていた実績がものを言ったかなと思います。多くの方々が、色々な各省に要望を出してくださり、折衝を繰り返してくださった後に、文化庁さんが引き受けてくださって、ヨコハマトリエンナーレを継続して開催できるような制度を作ってくくださったという経緯がございます。それは、資金面での苦労があったということです。

もう一つ、運営の面では、横浜美術館の館長が逢坂恵理子さんという、今トリエンナーレの委員長で、専門家でございましたので、国際交流基金の方が運営から外れてしまったんですけれども、逢坂さんを筆頭に実施できるだろうと。近代・現代を対象とした横浜美術館には、現代アートに長けたスタッフがいたので、問題無いというところがひとつ。最後に、地元のバックアップなんですね。ボランティアさんの数が札幌市さんは一回目で1100人というのはすごいなと思ったんですけれども、トリエンナーレを3回やっていて、当時1400名位ボランティアスタッフさんの登録があったんですね。それに加えて、普段から活動しているBankARTがあることや、もう一つ強力なところでは、黄金町というエリアで、アーティストの方に入っていただいて街づくりを行ってきたこと。始まった時は、現代アートってなんだ、わけわかんないという声があったそうですが、そのまちの方が徐々にアーティストと触れ合って、新しい考え方を入れて、まちづくりが上手くいったということがありました。ですので、そういう地元の方の声が「当然トリエンナーレ継続するんでしょ」、という大きな後押しになりました。正直一番苦労したのは、一番最初の資金のところ。規模を小さくしなきゃいけないかもというところが、結果的には、文化庁さんに大きな支援をいただいて継続でき、今回も開催できているという状況でございます。

佐々木: 文化庁がこれからどう支援していくかは、もし時間があればこの後、青柳長官からも一言お話いただきたいと思いますが、どうしても、大都市がやる大規模な芸術祭というのは、知事や市長さんの威信もかかっているから、かなり気張ってやっていて、今日のシンポジウムでも結構が

チンコ勝負になるので、なんとか緩衝材がいるだろうと思って、ぐっと小さい規模の民間から芸術祭を興してきた山出さんにお声掛けしました。

なんとといっても、「混浴温泉世界」という非常にショッキングな名前があって、私もびっくりしちゃったんですけども、さらにA級劇場とか言われて、えっと思ったんですけどもね。山出さんという個性がキラリと光るネーミングも含めて札幌・横浜トリエンナーレ型と違うやりかたを山出さんは、どういう風にして、多くの小さなイベントをキュレーションしてこれたのか、その創造の源泉とはなんだろうか？もしお答えいただけるならお願いします。

山出： なかなか難しい質問だと思いながら…。そもそもの話をすると、僕は2004年まで、それこそ文化庁さんの代替研修でフランスに行って、一応僕アーティストなので、作品をずっと作っていたんですね。プロデュース的なことって全くそれまでは考えたことがなかったんですけども、たまたまあるインターネットの新聞記事を読んで、この人に会いたいという人がいて、それは別府の人だったので、もう日本に帰ろうということになったんです。僕大分県出身ですが、別府は生まれた場所でもないし、いまだに10年やっていますけれども、住んだことも無くて、ヨソモノなんですよ。今は非常に意識してそうしてるんですけども。その中で、色んなアーティスト達にこの非常に特異な、魅力的なまちを見てもらいたいということと、すごくノスタルジックな話だけれども、僕が子供の頃見た風景を、あのみんなで浴衣を着てすごい猥雑だけれども、なんだかわからないその場所の磁力というものをすごく感じられる風景を、僕はとても見たい、思い出して見たくなったというのが最初なんです。なので、誰からも頼まれてないんですよ。実は、とてもアーティスト的な発想かもしれませんが、継続するというのは、多分そしかなないんだと思っていて、信じたいんですよ、そこを。つまり、パッションのある人間が、リスクをしっかりとって活動を続けて、その熱を広げていって、自分だけが何かをする、自分がリーダーシップをとって全てを管理することをするのではなく、色んな活動が勝手に生まれてくる。伝染するというか、僕はそれをやりたいんですよ。なので、今日大分県の方が来られてますけれども、今大分県全体で少しそういうことが広がってきていて、言ってみれば、BEPPU PROJECTに負けないぞ！という教え子が出てきて、かなり僕らもちょっとあたたか押し気味なんですけれども、それはとても嬉しくて。僕の今の一番の夢というか、理想は、どんだんうちのPROJECTの影がなくなって、山出もやる事が無くて、お声がかからない。けれども面白い活動が毎日のように起こっているということを作りたい。自分がこうなにかそこでコントロールするのではなくて、色んな人達が始めていく。それはとても小さなタネかもしれないけど、それが多分創造的な都市だと信じてるんです。

佐々木先生からご紹介いただいて、2006年別府でも創造都市の国際シンポジウムをやって、チャールズ・ランドリーさんのお話が、創造的な都市というのは、何らかの箱ができることではありません。というような話の中で、一般のおじいちゃんも行政の方も全ての人間が創造的な活動、または考え方が許される都市のことなんだ、ということ話をされて、僕それはとても大切な言葉だと思っていて、フォーカスすべき人だと思っています。

佐々木：やはり、パッションが源泉なんですね。それは、その温度が大事で、多分高い温度の人たちが集まりだすと、臨界質量が高まっていくよね。今、大分はその直前まで来てると思っています。来年はある程度、臨界点を越えていくのかも。

山出： 来年7月から9月に混浴温泉世界やるんですけども、やはり色んなことがあって、来年4月に大分県立美術館ができる。それだけじゃなく、横に繋げていって、色んな形で連携を始めていくようなことにしていきたいし、大分県の知事もそうですけれども、来年がとにかく大分として本当に大切な年で、それも7月から9月にかけてというのは、ターゲットの月です。この場でこんなこと言うのはあれですけど、来年この創造都市ネットワーク会議を大分県でやってほしいですね。いい温泉もご紹介しますし、お食事処も満載、国東半島で登山とアートを楽しみ、汗をかいてる横で汗を流し、トリテンナーレを楽しみつつ、お手洗い行くときはトイレナーレを楽しみ、移動する時は、トレイナーレで移動するという感じで、ぜひ皆さまお待ちしておりますので、みなさまよろしく願います。ありがとうございます。

佐々木： 今年はずっと札幌市さんが昨年の秋にユネスコ創造都市ネットワークに加盟され、国際芸術祭が今年開催されるということがあったので、この時期に政策セミナーを開催させていただきました。併せて2日後の8月10日には、東川町で、創造農村ワークショップということになります。これまでは、ワークショップとセミナーは別の会場、別の場所だったんですけども、今回は連続的に開催ということなんですけど、来年の場合は、今立候補宣言があったので、創造都市政策セミナーは大分が有力候補だと思います。農村の方は、十日町さんが来られてるし、大地の芸術祭のような色々なイベントの場で、お互い視察をしながら、経験談を語り合ってもいいですね。今回やはり札幌のケースを見ていても、坂本龍一さんが山口情報芸術センターYCAMの館長をやられておられたので、そのネットワークを使っておられる。それから、やはり瀬戸内国際芸術祭とか、大地の芸術祭で北川フラムさんが作られたネットワークがある。こういうものは、重層的にあるので、比較的短い期間でもある程度のところまでは成功するということが良かったと思うんです。その中であちこちで同じようなアーティストが出てきて、なんか個性が見えないと言われないようにしていく。つまり、多様性を高めるということです。今回「都市と自然」というテーマを最初聞いた時に、難しいテーマを掲げたなと思ったんですね。都市と自然って違うものじゃないですか。自然といえば農村といえば自然の要素が多いけれども、都市っていうのは、人工的な場ですよね。都市の文化っていうのはやっぱりその自然というよりかは、むしろ非常に高度な文明の積み重ねなんですね。それでどうやってこれを結びつけて解明するか、難しいテーマだと思ったんですけども、おそらく坂本さんは直感なんだろうね。空からヘリコプターとか色んなところから札幌を見た時に、都市のすぐ近くが自然で囲まれている。なので、「都市と自然」ということを直感したんだと思うんですけど、このテーマの選び方とか、坂本さんから色々注文を出されて、現場もあたふたしたとか、そういう苦労話がもしあればお願いします。

酒井： やはり「都市と自然」というテーマに関しては、さきほどの冒頭の市長の挨拶にもありましたけれども、札幌市はこういう都市機能を十分に持ちながらも、ほんとにちょっと行きますと、海があり、川があり、山があり、スキーが出来て、海にも行けて、そういうのは札幌の財産だと思っております。逆に言うと、さっきキュレーターの方がおっしゃっていましたが、俯瞰してみると札幌には中間的なものがなくて、本当に都市と自然しかない。むしろ札幌の特徴というのは、まさに都市と自然なんだ、というところもこのテーマの在り方の中にはあったのかなと。今回、作品を見ている、それを対立するものと捉えている作品もありますし、それらがどう融合していくのか、折り合いをつけていくのか、と捉えているものもあるし、わたくしは今回のこのテーマは、非常にわかりやすいテーマでしたし、美術館もたまたま、自然の中にあり、そして都市部もある。非常に開催としてもそういう形で収めやすかったかなと思います。

佐々木： じゃあひとことだけ事務局長さん、どうぞ。

小田垣： 事務局長の小田垣でございます。都市と自然についてですが、これからの都市の在り方を考えるという時に、環境負荷をかけてきた都市の成長を、これを今振り返って、今一度自然と都市の関係性を考えていこうと、そういう趣旨でございます。

佐々木： ありがとうございます。

長官に一言お願いする前に、これからそれぞれが連携してどうやって日本全体を元気にするというのをやりたいと思うので、それに向けて提言とかアドバイスとか、みなさんありますか。

田邊： 横浜トリエンナーレは専門家の方のネットワークで、インターナショナルビエンナーレアソシエーション(IBA)というのがこの夏にベルリンで総会をやり発足、参加しまして、ネットワーク化されているんですが、国内の芸術祭のネットワークというのが無いですね。CCNJを活かして、どうやってネットワーク化していくかというのを、次に横浜がその役割を担わなければいけないだろうと、手前味噌ですけども思っております。やっぱりそれは過去の歴史も含めて、そういうことを取組として、行政が深く関わってやらなきゃいけないだろうと。CCNJと別のところでやるのではなくて、なにか CCNJ の中でできないかなと、そういう話をしているところでございます。

山出： 今、県内の中で、基礎自治体との連携ということ、すごく頑張ろうと思って動いているんですけど、例えば、今回の札幌さん、横浜さんに限らず福岡でもやられてますけど、そういう形での連携って非常にあると思うんですが、同時に都市というよりも、アートって横軸を挿すのに非常に柔軟性のあるもののはずなんです。それはなぜかという、アートではないんだと僕は思うんですが、要するにクリエイティビティということだと思うんです。それは、いかなる分野においても、教育でも福祉でもなんでも、そこには創造性という人間が関わっている以上、創造性というものは必要であって、その創造性を豊かにしていく、また更に活力を回復していくという意味で、ア

ートというものが必要だし、我々のビジョンの話だと思うんですよね。そういう意味では、都市の連携ということと共に、産業であるとか、多分野との連携というものも、もっともっとやっぱり考えないといけないなと感じています。

佐々木：では、長官ずっとお聞きになって、これから文化庁としてもこういう方向だとか、一言お願いいたします。

長官：どうもありがとうございました。こんなにおもしろくて、そして、それぞれがこんなに工夫をしていらっしゃるということを聞いて、大変心強く思いました。そういう意味で、私達も今、色々な助成事業等が業界や団体や組織に向いていましたが、少し軸足を地域に移そうということを考えております。ちょうど、政府も「まち・ひと・しごと・創成本部」というものを作って、本腰で地域おこしをやるようしているんで、それに乗ってできるならば、平成27年度予算が少しでも増えるようにしたいと思っております。それから、もうひとつは、今お聞きしていて、やっぱりネットワーク化とネットワーク化によるそれぞれの地域への共振というか、響きあうような効果が拡大するというものに、ぜひこのCCNJはなっただきたいと思いました。実は、私ども色々分析しておりますと、文化関係の投資というのは大体、経済波及効果が、最低でも1.4くらいあって、1.7から1.8ぐらいはあるケースもあります。その数値は、公共投資よりも高いくらいなんです。様々な地域で、文化投資をすることは、経済的にも非常に効果が高いものと考えております。文化庁としても、皆様のお取り組みを応援しております。

佐々木：ということで、文化庁は全面的に応援をされるということで、安心して前へ進めてください。今日はどうもありがとうございました。